

2424

25-202

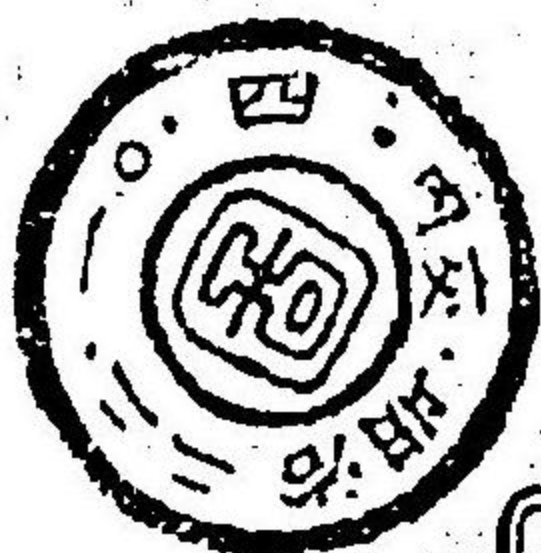
NO 20450 / 22



小原重哉撰

本獄制沿革史

東京 金港堂



福



福

故

春  
飲  
山  
人  
博  
文

題



監獄史

緒言

一我邦古今來歴史ノ書ハ實ニ汗牛充棟ノ多アリト雖モ其專ラ監獄制度上ノミニ就キテ沿革ノ終始ヲ網羅記述シタル者ハ未ダコレアラザルナリ是故ニ世間ノ獄制學ヲ講ズル者ト雖モ其源賴朝以往ノ如キハ固ヨリ無論ナリ夫ノ徳川家康ノ府ヲ江戸ニ開キタル以來ノ沿革ヲダモ之ヲ知ル者或ハ鮮少ナラン能ク西洋諸國ノ制度ヲ説クモ本邦ノ事跡ニ至テハ反テ懵暗ニシテ動モスレバ權衡ソノ宜ヲ失スル者アリ是レ蓋シ溫故知新ノ材料ニ供スベキ完全ノ史書ナキニ由レル故ナ

リ著者深クコ、ニ憾アルコト久シ乃チソノ淺識ヲ省  
ミズ夙夜ニ拮据シ廣ク群書舊記ヲ涉獵參照シテ竟ニ  
コノ書ヲ撰スルニ至レルナリ

一本書ハ記述ヲ清寧天皇即位ノ四年ニ始メ明治九年ニ  
至テ筆ヲ止ム故ニ明治十四年九月頒布ノ監獄則ヲ施  
行セラレタル以後ニ係レル者ハ總テ載叙セズ

一明治十四年九月以後ノ獄制沿革ノコトキハ他日別ニ  
之ヲ編纂シ以テ本史ノ續篇トナサント欲スルナリ

明治二十二年七月

撰者 識

目次

第一篇 上古史

緒論

第二篇 中古史

獄舍 遇待 疾病 囚員 寄場 流移

第三篇 近世史

第一卷 獄舍

第二卷 遇待

第三卷 未決已決病監

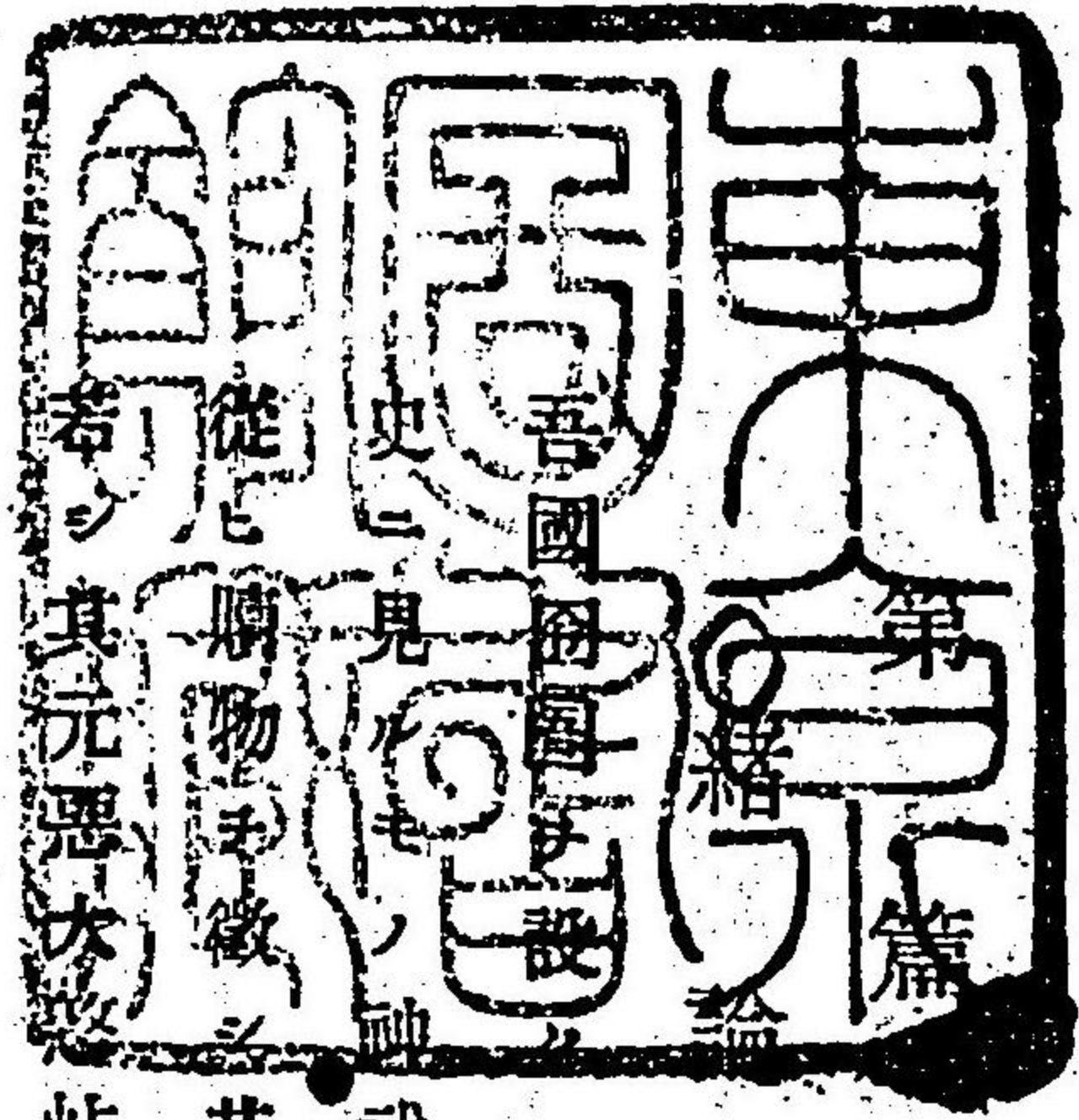
第四卷 懲役徒罪合叙ス

第五卷 流移

No 20450 / 22

# 大日本國獄制沿革史

備前 小原重哉撰



吾國國書ヲ設ケル厥始得テ知ル可カラズ惟紀元以來刑ヲ用フルコ  
 史ニ見ルモノノ神武天皇即位ノ年一即紀元 罪名若干條ヲ定メ其輕重ニ  
 從ヒ刑物ヲ設ケシ其ナシテ神明ニ誓テ拔除シ惡ヲ去リ善ニ遷ラシム  
 若シ其元惡大改 怙終悛ムルナキモノハ物部氏ニ命ジ之ヲ戮セシム  
 甲兵ヲ掌ル々 崇神天皇即位ノ十年即紀元五百 武埴安彥出雲振根ヲ誅  
 シ履中天皇即位ノ元年即紀元六十年 仲皇子ノ謀反ヲ平ゲ其黨阿曇連濱  
 子等ヲ捕フ其罪死ニ當ス特ニ詔シテ死ヲ宥メ之ヲ黥シ從タルモノ



ハ役使ニ供スト之レ有リ既ニ犯罪者アルトキハ之ヲ禁圍スル處ナ  
 カル可カラザルハ事理ノ當ニ然ルベキトコロナリ然ラバ則チ圍圍  
 ノ事史ニ明文ナシト雖モ必ズ其設ケアルヲ推シテ知ル可シ其明文  
 アルハ清寧天皇即位ノ四年即紀元千四百一十三年天皇親カラ囚徒ヲ錄スト云  
 ニ始リ厥後仁賢天皇即位ノ四年即紀元千五百一十一年的臣蚊島穗食君罪アリ  
 皆獄ニ下リテ死ス孝德天皇大化二年即紀元六百零六年大赦ヲ行ヒ諸國ノ  
 流人及獄中ノ囚皆放捨ス等歴々史書ニ見エタリ文武天皇大寶元年  
即紀元六百六十一年律例ヲ撰定スルニ道テ囚獄ノ方法漸ク備ル故ニ今獄制  
 沿革史ヲ作ル大寶元年ヲ以テ始トス  
 文武天皇大寶元年即紀元六百六十一年律例ヲ撰定シ囚獄司ヲ置キ刑部省ノ管  
 轄スルトコロトナス其ヲシテ罪人ヲ禁囚シ徒役功程及配決ノ事ヲ掌  
 ラシム

正一員正ハ司官ヲ云 佑一員佑ハ次官ヲ云

大令史一員 少令史一員

物部四十員物部氏世々兵刑ヲ掌リシガ本宗已ニ衰ヘ其物部丁二十員囚獄ヲ守ル者ヲ云

凡禁囚死罪ハ枷械ノ頸ニ在ルヲ云及流罪以下ハ杻械ノ手ニ在ルヲ云ヲ去ル杖罪ハ

散禁唯其出入ヲ年八十以上十歳以下及癡疾懷孕侏儒ノ類ハ死罪ヲ犯

スト雖モ亦散禁議請シテ減等スベキ者重キハ脛禁械ノ脛ニ在ルヲ云輕キハ責

保ス初位以上及死位ノ贖スベキ者重キハ桎禁械ノ手ニ在ルヲ云輕キハ散禁疾

病ノ者醫藥ヲ給ス病重キ者ハ枷杻ヲ脱シ去リ其家一人獄ニ入テ侍養

スルヲ聴ス

囚死シテ親戚ナキモノハ皆閑地ニ殯埋シ榜ヲ其上ニ立テ姓名ヲ記シ

仍ホ本屬ニ下ス仍ホ本屬ニ下スハ親戚ニ下スヲ知ルベシ

婦人ノ獄ニ在ル男夫ト其所ヲ異ニス産月ニ臨ムモノハ責保シ出ルヲ  
聽ルス死罪ハ産後滿二十日流罪以下ハ産後滿三十日并ニ即チ追禁ス  
死罪ヲ犯ス者ニシテ子ヲ産ス家口ノ付スベキナケレバ近親ニ付シテ  
收用セシム近親ナキモノハ四隣ニ付ス若シ養テ子ト爲ント欲ルモノ  
アレバ異姓ト雖モ之ヲ聽ルス

凡死罪ヲ犯シテ禁ニ在ル者惡逆以上ニ非ザレバ惡逆ハ八處ノ一ニシ  
及謀殺シ伯叔父姑兄姊外祖父母ノ喪ニ遭ヒ婦人ハ夫ノ喪及祖父母  
母夫夫ノ父母ヲ殺スモノヲ云父母ノ喪ニ遭ヒ婦人ハ夫ノ喪及祖父母  
ノ喪ニ重チ承ル者ヲ承クルモノヲ云後ハ皆七日ノ休暇ヲ給フテ哀ヲ  
發セシム流徒ノ罪ハ二十日

凡獄皆薦席ヲ給ス紙筆及兵刃杵棒ノ類ハ並ニ入ルヲ得ズ  
長官囚獄司ノ十五日毎ニ一タビ獄囚ヲ檢ス長官ナキトキハ次官正ヲ云云  
之ヲ檢ス

凡獄囚ニ衣糧薦席醫藥ヲ給シ及獄舍ヲ脩理スルノ類皆贖贖等ノ物ヲ  
以テ其用ニ充ツ無キトキハ官物ヲ用フ

諸國亦タ囚獄アリ其國司ノ管轄スルトコロトス一ニ囚獄司ノ法ノ  
如シ凡疑獄ハ皆刑部省ニ讞ス決スル能ハザルモノハ太政官ニ申ス  
太政官特ニ法律ニ明カナル者ヲ差シテ之ヲ巡覆セシム其使者ノ至  
ルトコロ獄囚ノ枷紐鋪席及疾病糧餉ノ法ノ如クナラザル者ヲ檢閱  
ス

以上囚獄ノ事載籍ニ見ユルモノ僅ニ此ニ止ル

凡流移ノ人妻妾アルハ必ズ相隨ハシム  
流移人路ニ在レバ皆程糧ヲ遞給ス糧ヲ請フ毎ニ停留スルヲ二日ヲ過  
ルヲ得ズ其配所ニ至リ居作スル者並ニ糧ヲ給ス  
流移人路ニ在テ婦人子ヲ産スルモノアレバ休暇二十日ヲ給フ家女及



婢ハ七日

流移人配所ニ至リ六年以後ハ仕官スルヲ聽ルス唯反逆縁坐流ヲ犯シ及反逆特ニ死ヲ免シテ配流セシ者ハ此限ニ在ラズ  
流徒居作ノ者ハ畿内ハ京師ニ送り在外ハ本處ノ役ニ供ス婦人ハ縫作及舂ニ配セシム皆欽若クハ盤枷ヲ着ケシム足ハ讀ヲ以テ病アレハ脱スルヲ聽ルス

流移人ノ祖父母父母從テ路ニ在テ喪亡スルトキハ休暇ヲ給フ十日家口ノ死スアレバ三日家人奴婢ハ一日  
流移人未ダ配所ニ達セズ而シテ祖父母父母郷ニ在テ喪スルモノハ配所者ヲ云ル其喪ヲ聞クノ地ニ於テ休暇三日ヲ給ヒ哀ヲ發セシム其役ニ在テ而シテ父母ヲ喪スル者ハ父母ノ從フト從ハ休暇ヲ給フ五十日哀ヲ舉ゲシム二等親ハ七日

以上流徒人ノ事ヲ歴記ス其詳細ノ事ハ得テ知ル可カラズ

淳和天皇天長元年即紀元千四百八十四年檢非違使ノ廳ヲ置キ衛府ノ人ヲ以テ之ニ補シ衛府ノ人ハ左衛門右衛門左衛門右衛門ノ督佐尉ナリ刑獄ノ事ヲ掌ラシム是ヨリ以後刑部省ハ唯空衙ヲ持スルノミニテ其權ナシ故ニ囚獄司亦檢非違使ノ隸屬ノ如シ

大寶元年囚獄ノ法ヲ定メテヨリ以來後鳥羽天皇文治二年ニ至ル迄凡四百八十五年間時ニ沿革スルトコロ有リト雖モ大率ネ大寶ノ制ヲ以テ憑準トナス其間聖武天皇天平三年即紀元千七百九十一年車駕京中ヲ巡幸シ獄前ヲ經過シ囚人ノ悲吟叫呼ヲ開キ意之ヲ愍傷シ使テ遣シ犯狀ノ輕重ヲ覈シ恩ヲ降シテ悉ク死罪以下ヲ免シ且衣服ヲ賜ヒ其レヲシテ自新セシムル事アリ又仁明天皇嘉祥二年即紀元千五百〇九年京師ヲ巡幸シ一舍ノ前ニ至ル問テ其囚獄司タル事ヲ知り即恩詔ヲ下シ悉

シテ固ヨリ定準トナス者ニ非ズ

後鳥羽天皇文治二年即紀元千八百四十六年源頼朝ヲシテ征夷大將軍ヲ以テ總追捕使ヲ兼シム是ヨリ厥後朝廷政刑ノ權ヲ擧テ征夷大將軍ニ委ス故ニ檢非違使モ亦遂ニ有名無實ニ歸ス

源頼朝府ヲ鎌倉ニ開キシヨリ北條氏其臣屬ヲ以テ朝廷ノ官爵ヲ受ケ世々其政權ヲ執ル後堀川天皇貞永元年即紀元千八百九十二年北條泰時式目四十八條ヲ定メ式目ハ條例類ナリ鎌倉ノ外別ニ廳ヲ京師ノ六波羅ニ設ケ並ニ刑獄ノ事ヲ掌ラシム此ニ至テ海内ノ形勢一變シテ刑獄ノ方法復タ大寶ノ制ノ如キ能クハズ後醍醐天皇建武元年即紀元千九百九十四年既ニ北條高時ヲ誅シ黨與悉ク平ク是ニ於テ政刑ノ權再ビ朝廷ニ復ス決斷所ヲ皇城ノ郁芳門外ニ置キ訟獄ヲ聽理セシメ大事ハ天皇親カラ

記録所ニ臨テ之ヲ裁決ス殆ンド將サニ大寶ノ舊典ニ復セントス而シテ未ダ幾ハクナラズシテ復タ政權ヲ足利氏ニ委ス是ヨリ以來封建ノ勢漸ク成リ兵亂相踵ク織田氏ハ足利氏ニ代リ豊臣氏ハ織田氏ニ代ハリ延ヒテ徳川氏ニ及ビ後陽成天皇慶長八年即紀元二千二百六十二年徳川家康征夷大將軍トナリ豊臣氏ニ代ハリテ政刑ノ權ヲ握ル源頼朝ヨリ徳川家康ニ至ルマデ凡ソ四百十年間監獄ノ事載籍ニ存セス故ニ得テ考フ可カラズ

○第二篇

後陽成天皇慶長八年即紀元二千二百六十二年徳川家康征夷大將軍ニ任ゼシヨリ以來囚獄ノ事ヲ記セル書籍屢火災ニ罹ルヲ以テ詳細得テ知ル可カラズト雖モ其儘カニ存スルモノニ就テ獄舎獄舎内ニ附記スノ方法其職員遇

待衣食其他物品ヲ給 疾病囚員寄場流移ノ六門ヲ分テ之ヲ注記スル  
左ノ如シ

獄舎

家康ノ將軍ニ任セラレシ始メ江戸ニ獄舎ヲ設ケルノ地今ノ常盤橋門  
外ノ氷濱ニ在リ厥後靈元天皇延寶年間 其幾年ナルヲ詳カニセズ然レ  
八年ニシテ元紀元二千三百三十三小傳馬町ニ移ル  
獄舎凡ソ五ツ曰ク揚屋 犯罪ニ罰見スル者 曰ク揚屋 土人僧侶ノ犯  
曰ク大牢 曰ク百姓牢 拘ラズモハ平民有籍無籍ニ 曰ク女牢 婦人ノ犯  
右ノ獄舎ハ石出帶刀ナル者其看守ノ職ヲ世々ニス之ニ隸屬スル者同  
心七十八人 所謂大寶ノ制ニ 獄丁四十六人 所謂大寶ノ制ニ 所南北町奉行其  
隸屬カ 與二人 ナシテ 獄署ニ直シ一切囚獄ノ事ヲ檢察セシム  
其他病監ニツ 俗ニ之ヲ稱シ一ハ淺草千束村ニ在リ善七郎ナル者世々

之ヲ守ル一ハ品川驛ニ在リ松右衛門ナル者世々之ヲ守ル中御門天皇  
享保七年 即紀元二千三百八十二年 始テ之ヲ置ク 疾病門ニ記スハ又本  
所松坂町ニ獄舎アリ 代官ノ管轄スル處 馬喰町代官署ノ管轄スル處  
ニ係ル 代官ハ當時地方官ノ稱ニシテ 馬喰町代官 其隸屬 即手ヲシテ之  
ヲ監守セシム 其始テ失ス  
法廳凡ソ五ツ 評定所 曰ク町奉行所 曰ク寺社奉行所 曰ク勘定奉行所  
曰ク火附盜賊改役所 將軍ノ先鋒隊長ニシテ 放火者若クハ盜賊ニ係ル者  
ノ五法廳ヨリ 罪囚ヲ小傳馬町獄舎ニ押送スルハ 鎖鑰ヲ管スル獄吏  
即同 入監證書ニ照シ 其囚人ヲ獄舎内ノ内櫃ト稱シ 外櫃ト稱シ 外  
間ニ在ル通路ノ所ロニ立タシメ 獄丁ヲシテ 其衣服ヲ脱セシメ 金錢刃  
類發火具筆墨ヲ隱藏スルヤ否ルヲ檢査ス 其解禁ノ時モ亦ク押送セシ  
法廳ヨリノ出監證書ヲ照ラシ之ヲ出ス

囚中才幹アルモノヲ選ミ一房毎トニ名主一名ヲ置キ又同房中ヨリ十  
一名ヲ選ミ之ヲ役付ト稱シ名主ニ副ス並ニ其房中罪囚ノ暴行ヲ戒  
俗ニ之ヲ牢  
名主ト云

輕重罪ノ囚人チ一房内ニ雜禁シ輕罪囚チシテ重罪囚ノ情狀ヲ察知セ

揚坐敷若クハ揚屋ニ禁ズル罪囚ヲ法廷ニ引出ストキハ之ヲ轎子ニ乘  
セテ押送ス獄舍近傍ニ火ヲ失シ將サニ獄舍ニ延燒セントスルキハ揚  
坐敷ニ禁ズル者逆罪ヲ犯ス者逆罪ハ其主若クハ父母及子疾病アル者  
皆轎子若クハ草番ニ昇キ便宜ノ地ニ避ケシム自餘禁囚ハ火獄ニ及ブ  
ニ至テ即時解放シテ之ヲ本所回向院ニ避ケシム回向院ニ火ヲ避ケシム  
保七年即紀元二千三百八十二年三日以内ニ投歸スルヲ命ズ其投歸ス  
第八世將軍德川吉宗ノ時ニ始ルル者ハ獄署ヨリ當初之ヲ押送セシ法廳ニ具申シ其法廳本罪ヲ寛宥ス

逆罪ヲ犯ス者ハ此限ニ在ル者反獄越獄脫監或ハ相殺傷スルヲ除ク外  
禁囚ノ暴行若クハ犯則ハ獄署ニ於テ之ヲ懲治ス其懲治ノ方獄丁チシ  
テ其囚チ圍房ノ檻子ニ縛シ若クハ之ヲ庭席ノ上ニ匍匐セシメ看守ノ  
吏之ヲ打撲ス打撲ノ具ハ箠尻打撲畢テ背格背格ハ反手セシメ他ノ  
房舍ニ移ス本罪處斷ノ日ニ至ル迄脱格セシメズ但疾病ニ罹リ若クハ  
悔悟ノ徵顯然ナル者ハ此限ニ非ズ

毎月初更ノ時ニ至レバ鎮靜ヲ主トシ房中ニ於テ說話シ若クハ聲ヲ發  
シ或ハ濫リニ起步スルヲ聽ルサズ若シ響音ノ檻外ニ聞ユルコトアレ  
バ看守ノ吏直ニ其事狀ヲ名主又ハ役付ノ者ニ問糾ス  
毎月一日八月ハ二獄司即石出ト當直ノ町奉行與力ト相蒞ミ每房ノ囚  
人チ内檻ト外檻トノ通路ノ地ニ出シ獄吏押丁チシテ房内ニ入り囚人  
ノ衣服ヲ始メ衾褥其他ノ器具ヲ點檢セシメ脱監等ノ諸惡行ナカラン

ヲ豫防ス

看守ノ吏夜中一時間毎トニ獄丁二人ヲシテ燭ヲ持セシメ内檻ト外檻トノ間ニ在ル通路ヲ巡察ス  
毎月一次町奉行禁囚ヲ檢察ス又監察若クハ徒監察小監察臨時ニ禁囚ヲ檢察ス

揚坐敷若クハ揚屋ニ禁ズル罪囚ヲ法廷ニ押送スル時ノ轎子ノ扛夫ハ小傳馬上町ヨリ通鹽町ニ至ル迄ノ地主ニ毎歲一千人ヲ課シ之ニ充ツ其數滿ルキハ官之ヲ雇フ囚人ノ糧米等ヲ搬運ノ費ハ小傳馬第一町ヨリ第三町ニ至ル迄ノ地主ニ課シ獄舍塀墻外ノ堰埒即土塹溝行柵來等ハ本銀第一町ヨリ第四町迄ノ地主ニ課シ之ヲ修繕セシム犯由牌若クハ梟首臺ノ費用ハ材木第一町ヨリ第八町ニ至ル迄ノ地主ニ課ス其他獄舍等ハ官費ヲ以テ建築若クハ修繕ス

獄舍周圍内ノ掃除及平民ノ囚人ヲ押送スル丁夫ハ獄署ニ屬スル非人非人トハ平民ヲ以テ之ニ充ツ一日雇錢三百文刑屍若クハ病死ハ屠人團頭即穢多彈左衛門ナル者ニ命ヲ其部下ノ者ヲシテ小塚原刑場内ニ瘞埋セシム

(二) (遇待)

罪囚ノ糧餉ヲ分テ四等トス

飯

壹汁三菜

汁ハ豉ヲ以テ蔬菜ヲ盛テ羹トナス平皿ニ豆腐若クハ蔬菜ヲ盛リ坪ニ豉豆若ハ蔬菜ヲ盛リ小皿ニ鹽菜ヲ盛ル合テ一汁三菜トス  
右ハ一人ニ付一日ニ玄米六合精白合四勺トナル豉三十目雜費料錢二百文  
十總川氏ノ始ハ三ヲ以テ之ニ充ツ  
右揚坐敷ノ罪囚ニ給ス

飯

汁 鹽菜

右ハ一人ニ付一日ニ玄米五合精白五勺ニシテナル鼓三十目雜費料錢百文川總  
氏ノ始ハ十五ヲ以テ之ニ充ツ

右揚屋及平民ノ罪囚ニ給ス

飯

汁 鹽菜

右ハ一人ニ付一日ニ玄米六合精白五勺ニシテナル鼓三十目雜費料錢百文川總  
氏ノ始ハ十五ヲ以テ之ニ充ツ

右房中名主及役付ノ囚ニ給ス

飯

汁 鹽菜

右ハ一人ニ付一日ニ玄米三合精白七勺ニシテナル鼓三十目雜費料錢百文川總

氏ノ始ハ十五ヲ以テ之ニ充ツ

右女囚名主以下ニ給ス

以上雜費料ノ内ヲ以テ薪箸並ニ米搗費ヲ辨ズルノミナラズ一日給ス  
ルトコロノ鼓モ亦其雜費料中ヨリ之ヲ辨シ別ニ現品ヲ給セズ

凡ソ囚人ニ糧餉ヲ給スル朝夕二回トス若シ病アル者未ダ病監ニ移麥飯

稠粥俗カニト云バ赤小豆粥ヲ喫セント乞フアレハ之ヲ聽ス

每歲七月十五日南北町奉行ノ廳ヨリ禁囚一般ニ鯖魚索麵ヲ給與ス

有籍ノ囚ハ官ヨリ衣服衾褥ヲ給セズ其親戚ヨリ之ヲ送致セシメテ乞

フキハ之ヲ聽ルス然ルキハ獄署ヨリ當初其罪囚ヲ押送セシ法廳ヲ經

由シテ其親戚ニ報ゼシム

無籍ノ囚ハ官ヨリ夏時ハ帷子粗麻ヲ以一領冬時ハ綿衣一領淺葱色ノ

スヲ製チ給ス但シ入禁ノ時着用セシ衣服襪履スルニ至ラザレハ之ヲ給セズ

囚人ノ親戚故舊ヨリ時服褌帶若クハ食物紙手巾錢以テ額トシ之ヲ三次ニ致チ送致セントスル者ハ當初其罪囚チ押送セシ法廳ニ請願シ其許可ノ證書ヲ得テ之ヲ獄署ニ送致セシム

毎月ノ一日ニ禁囚一人ハ一箇月間受用ノ紙百葉ヲ給ス紙質粗惡俗ニナリ若シ親戚ヨリ送致ノ紙アレバ其數ヲ照シメ給與ノ紙數ヲ省減ス

一房毎ニ白板巾曲尺三寸強長二尺厚鐵筆木柄三寸鐵針一分其形錐ノ各一箇ヲ給ス牢名主之ヲ管シ囚人情ヲ陣スルヲアラントスルキハ其旨ヲ名主ニ副スル役付ノ者即鐵筆ヲ以テ白版ニ書シ之ヲ看守ノ吏ニ致ス看守ノ吏之ヲ改寫シテ獄署ニ致ス

禁囚ニ浴湯ヲ聽ス正月二月十一月十二月ハ月ニ三次三月四月九月十

月ハ月ニ四次五月六月七月八月ハ月ニ六次トス其費用囚一人ニ付銀一分六厘ト定ム

每歲七月十三日病囚ヲ除クノ外衆囚チ圍庭ニ出サシメニ腰繩ニテ籠上獄吏蒞テ剃工ヲシテ之ヲ梳剃セシム凡剃工ハ四囚ニ一名トス

盛暑ハ各房ニ團扇ヲ給ス且囚人チシテ毎日順次ヲ以テ外櫃ト内櫃トノ間ニ出テ涼ヲ納レシム但地上ニ席ヲ設ク 互寒ハ紅蘿蔔ノ乾葉ヲ煎テ其液汁ヲ給ス凡一日ニ三次トス夜ハ湯婆ヲ給ス湯婆ノ製熱湯五合ヲ瓦瓶ニ盛リ布裝ヲ以テ包ム

(三) 疾病

囚人急病アレバ晝夜ヲ問ハズ看守者直ニ當直ノ醫員ニ報シ藥液ヲ給ス

毎日一次醫員病囚ノ房ニ至リ之ヲ診察ス急病重症ハ此限ニ在ラズ凡藥液ヲ給スル毎日三次トス重症ニ非レバ三次ノ内一次ハ再煎液ヲ給ス其病重キニ至ル者アレバ醫員必ズ其徵候書ヲ作り當初其囚人チ

押送セシ法廳ニ申報ス一煎藥若クハ故丹圓膏藥ノ類  
 病囚若シ死亡スルキハ醫員檢診シテ獄署ニ申報ス署吏ト當直ノ町奉  
 行與力ト相掖テ死屍ヲ檢視シ醫員其病候書ヲ作り獄署ヲ經由シテ當  
 初其囚人ヲ狎送セシ法廳ニ申告ス獄署ハ其廳法ノ旨示ニ從ヒ死屍ヲ  
 其親戚ニ下附シ或ハ刑場内ニ瘞埋ス刑場内ニ瘞埋ノ手續  
 但シ病囚ヲ遇スルノ法其病監ニ移ス者ト未ダ移ラザル者トヲ問ハ  
 ズ皆同シ

江戸小傳馬町ニ在ル監獄ノ制是ノ如シ其他京都大坂及長崎奈良等  
 奉行若クハ代官ノ治スルトコロ皆囚獄アリ大率チ小傳馬町ノ獄制ヲ  
 以テ定準トス大小藩亦タ囚獄ヲ設ク當時各自政ヲ爲スヲ以テ小異  
 同アリト雖モ其大綱ヲ提スルキハ徳川氏ノ制ニ外ナラズ

(四) 囚員

毎月一日獄署ニ於テ前月ノ囚員ヲ照算シ責保ノ者若干人行刑若クハ  
 出圖ノ者若干人前月ヨリ禁ニ在ル者若干人新タニ入禁スル者若干人  
 ト部分シテ帳簿ニ作り之ヲ町奉行ノ廳ニ申報ス  
 囚人入禁ノ月ヨリ六箇月ヲ經過シタル翌月ノ一日其囚人身分族籍等  
 ノ明細書ヲ作り町奉行ノ廳ニ申報ス町奉行之ヲ閱老ニ致ス  
 小傳馬町獄舎及淺草品川病監ノ罪囚ヲ合算シ大凡其數ヲ平均シテ一  
 月ニ六百五十員内外トス  
 囚員ヲ記スル帳簿未ダ具備スルモノヲ得ス故ニ其數ヲ詳覈シガク  
 シ小傳馬町ノ獄舎尙然リ況ヤ地方ノ奉行代官及大小藩ノ管スルト  
 コロノ囚員ヲ舉ルニ於テヤ但小傳馬町老獄吏ノ私記ニ存スル者  
 ニ據テ其大數ヲ舉ルコト如斯

(三) 寄場



石川島人足寄場俗ニ役夫ヲ稱シテ人地ト云フ寄場トハ徒刑ニ類似スルモノニシテ懲治ノ意ヲ寓スルモノナリ其方法左ノ如シ

光格天皇寛政二年即紀元二千四百四十一年第江戶海灣中ノ石川島ニ於テ人足寄場ヲ設ケ無籍無頼ノ答刑ニ處セラレ即時放釋シ難キ者ヲ此ニ移シ官ヨリ衣食ヲ給シ搾油等ノ役ニ服セシム厥後同天皇享和文化ノ際即紀元二千四百五十八年頃ニ至テ有籍ノ者ト雖モ答刑ニ處セラレタル後其親戚故舊ノ下付スベキ無キトキハ亦タ此ニ移シテ作業セシメ之ヲ懲治スルヲ旨トス若シ役場ヲ遁逃スルトキハ罰スルニ墨黥ヲ以テス墨刑ハ其左腕ニ十字ヲ黥ス

寄場奉行一員ヲ置キ之ヲ管守セシム其隸屬スル者元締アリ勘定役アリ下勘定役アリ醫員アリ署丁アリ水夫アリ服役ノ人足ニ衣食ヲ給スル左ノ如シ

衣服即上衣 赭黄色ノ木綿ヲ以テ製シ上衣ノ背ニ波紋ヲ染出ス 平民ト別異ス

糧餉分テ三等トス

玄米ト麥ヲ等分ニシテ一日ニ付六合

雜費料一日ニ付錢二十四文ヲ以テ跋及醬油ニ充ツ以下同シ

右役付ノ者ニ給ス毎房ニ役夫中ヨリ一人ヲ選ミ保長トス俗之ヲ世テ皆之レヲ總稱シテ役付トス

玄米ト麥トヲ等分シテ一日ニ付八合

雜費料錢二十四文

右搾油ノ役ニ服スル者ニ給ス

玄米ト麥トヲ等分シテ一日ニ付五合

雜費料錢二十四文

右平人足平人足トハ尋常ノ者ニ給ス

遁逃セシコト謀リ若クハ竊盜シ賭博スル者アレバ房外ノ外檻ニ縛シテ之ヲ懲ラス

列藩亦々往々徒場ヲ設クル者アリ其役使ノ方法等今之ヲ略ス

(六) 流移

流移人ヲ江戸ヨリ發遣スル地ハ非山代官ノ管轄スル大島八丈島三宅島新島神津島御藏島利島ノ七箇所トス而シテ流移人ヲ送ルハ大率チ春秋二期ト定ム

流移ニ處スベキ四人アレバ其發遣ノ時期ニ先チ其事ヲ町奉行ヨリ非山代官ニ報知ス非山代官ハ其時已ニ至レバ屬吏チシテ其船ヲ熾シテ之ヲ町奉行ニ申報セシム其發遣ノ日決スレバ約チ其十日前ニ之ヲ獄署ニ告グ

流移人已ニ刑名ノ宣告ヲ受ケ仍ホ禁固ニ在ルノ日親戚ヨリ贈資ヲ要

求スルトキハ之ヲ聽ルス獄署共要求スルトコロノ物品ヲ書シ町奉行チ經由シテ其親戚ニ報ズ親戚ヨリ贈致スレバ其親戚ノ姓名ト物品ノ名數トチ其囚人ニ通知ス

凡親戚ノ贈資ハ白米ハ二十苞一苞ニ四斗ヲ入ルヲ定メシト金ハ二十兩木竹ノ管ノ類モ亦々聽ス及器發火具

筆墨ハ聽ルサズ僧侶ハ之ニ加フルニ法衣ヲ聽ルサズ

發遣ノ前日獄吏其囚人チ悉ク庭ニ出シ若クハ刺工ニ命ジ之ヲ梳剃セシメ畢レバ之ヲ獄署ノ糺問所ニ糺問所ハ糺問シ若クハ死刑ヲ宣告ナリ拘引シテ其庭上ニ列跪セシム獄司帶刀出當直ノ町奉行與力連班シテ其發遣スルトコロノ島名ヲ宣告ス凡流刑ニ處スルモハ當初此始テ島名ヲ宣告ス俗ニ之ヲ島名ヲ宣告セズ至島名宣告畢テ仍ホ入禁セシム

官ヨリ流移人ニ給與スル資ヲ分テ三等トス

金二兩時價ヲ以テ錢貨ニ兌換ス以下同シ

用紙半紙四毎トニ

船中豫防藥丸散丹類ノ散丹

右揚坐敷ニ禁ズル者

金一兩

用紙同上

船中豫防藥同上

右揚屋ニ禁ズル者

金二分

時服一領

用紙同上

船中豫防藥同上

右有籍若シハ無籍ノ平民

發遣ノ日ニ至レバ獄司即石出當直ノ町奉行與力並ニ管鑰ヲ掌ル獄吏相蒞テ當初其囚人ヲ押送セシ法廳ヨリノ出監證書ニ照ラシ之ヲ出監セシメ町奉行ヨリ派出ノ與力同心ニ交付ス其與力同心之ヲ海口ニ護送シ其船艇シテ龜島橋則東湊町韭山代官ノ屬吏即手ニ交付ス凡一船ニ韭山代官ノ屬吏一名若シハ二名船司即船隸屬ノ水主同心二名若シハ三名其囚人ノ宣告ヲ受ケタル海島ニ解送ス

江戸ヨリ流移人ヲ發遣スル順序大率チ此ノ如シ京都大坂中國西國ヨリ發遣スル地ハ薩摩五島隱岐壹岐天草等トス其給資押解ノ方法ハ皆江戸ヲ以テ定準トス其他沿道ノ藩モ亦流移ノ刑ヲ行フ者アリ其管轄ノ海島ニ發遣ス沿海ニ非ル藩ハ流移ニ該ル罪囚ヲ其管轄内

僻遠ノ山中ニ移徙シ適應ノ業ニ就カシム者モ亦々之レ有リ

### 第三篇

#### 第一卷

今上天皇慶應三年天皇諱開ニ在ルヲ以テ仍ホ先皇ノ年十月十四日  
 征夷大將軍内大臣德川慶喜第五世上表シテ政權ヲ奉還セント請フ十  
 五日其請ヲ允シ是ニ至テ政權始テ朝廷ニ歸ス後鳥羽天皇文治二年  
 至ル迄凡六百七十四年トスヨリ德川慶喜之ヲ奉還スルニ其翌年々號ヲ改メ明治元年トス自時  
 厥後囚獄ノ事ヲ分テ獄舍遇待未決ノ未決已決病監懲役徒罪ヲ流移  
 囚員之ニ付スル者ノ六門ヲ立テ一門ヲ一卷ト爲シ記注スルヲ左ノ如  
 シ

#### (一) 獄舍

今上天皇明治元年即紀元二千五百二十八年正月十七日肇メテ太政官中七科ヲ置  
 キ刑法科其一ニ居ル二月三日刑法科ヲ刑法局ト改メ閏四月廿一日刑  
 法局ヲ改メテ刑法官トス囚獄ノ事仍ホ德川氏ノ舊ヲ襲ヒ其所在ノ地  
 方廳ニ委ス

#### 京都

六角獄舍 非田院病囚及輕罪囚  
ヲ禁スル處

右京都府廳ノ所轄ニ屬ス

#### 東京

小傳馬町獄舍

淺草品川二病監

石川島寄場

右四箇所ハ一時鎮將府ヲ置クノ日姑ヲク之レガ所轄ニ屬スト雖

モ未ダ幾クナラズシテ東京府廳ノ所轄ニ歸ス

別ニ軍務官糾問局ノ圍圍有リ當時軍事關係ノ犯人ヲ禁ズ軍務局之ヲ管轄ス又京都刑法官所屬ノ鞫獄司中ニ圍圍有リ其司ノ管轄スルトコロトス十一月五日東京ニ刑法官支廳ヲ置クニ及テ其支廳中又圍圍ヲ設ケ捕亡司ノ吏員ヲシテ之ヲ守ラシム此ニ至テ軍務官糾問局ノ圍圍ヲ廢シ其囚人ヲ其支廳中ノ圍圍ニ移ス明治二年即紀元二千五百二十年刑部省即紀元二千五百二十年刑部省ヲ置カレ其省中ニ囚獄司ヲ設クルノ制ヲ定ム然レモ未ダ實際施行セズ囚獄ノ事仍ホ其舊ニ因ル明治三年即紀元二千五百三十年正月二十六日東京府廳所轄ノ小傳馬町獄舎淺州品川ノ二病監石川島寄場ヲ刑部省ニ屬ス刑部省ヨリ刑部權大錄逮部權大佑從前ノ捕亡司ヲ廢以下官員數名及從來獄署ニ勤仕スル者徳川氏ノ時ノ獄ヲ以テ囚獄司ノ事務ヲ行ハシム二月十七日始テ囚獄司ノ官員ヲ任テ現ニ其事ヲ掌ラシム左ノ如シ

正一員正ハ長官ヲ云當時正ヲ任セシム

權正一員

以上奏任トス

大佑三員 權大佑二員

少佑二員 權少佑一員

大令史十一員 小令史十九員

以上判任トス

使部九十員 監門十一員

辻番人四人小傳馬町獄舎圍外ノ東西見張所ニ在テ看證スル者ヲ云フ

明治三年紀元一千八百七十二年既ニ上文ニ注スルモ三月圍房中名主及役付ノ者ヲ停メ輕囚若クハ所犯強竊盜ニ非ル者ヲ選ミ一房毎トニ一人ヲ命テ間頭トナス明治三年四月小傳馬町本銀町材木町ノ地主ニ賦課スルモノ

ヲ蠲除シ一切官費ヲ以テ之ヲ辨理ス川其地主ニ賦課スル目ハ總  
明治三年八月刑屍<sup>鼻首及斬</sup>屍體ヲ其親戚ヨリ乞フモノアレバ下付スル  
ヲ聽ルス其下付スベキ親戚ナキモノハ大學東校醫員ノ請ニ因テ解剖  
スルヲ聽ルス

囚獄司官員ヲ任ジテヨリ專ラ優恤ヲ旨トシ德川氏執柄ノ日ノ陋惡  
ナル弊習ヲ剷除改正スルモノ亦甚多シ宜シク後ニ記載セル部門ト  
德川氏獄制ノ部トニ參照シテ其沿革スルトコロヲ見ルベシ

明治四年<sup>即紀元二千五百三十一年</sup>七月刑部省ヲ廢シ司法省ヲ置キ囚獄司ヲ以テ  
之ニ屬ス八月囚獄司ヲ廢シ其事務ヲ盡ク東京府廳ニ屬ス

是ヨリ先キ囚獄司ノ管スルトコロハ唯東京ノ囚獄ニ止テ其他ハ皆  
所在ノ地方廳管轄スルモノトス此ニ至テ東京ノ囚獄亦其府廳ノ管  
轄ニ歸ス然モ囚獄ノ法則等ニ至テハ司法省ノ掌ルトコロトス

明治五年<sup>即紀元二千五百三十二年</sup>十二月監獄則及圖式ヲ<sup>圖式ハ今各地方廳ニ頒</sup>  
布ス左ノ如シ<sup>各地方ノ囚犯ヲ處待シ及懲役ニ之ヲ施行シ其</sup>

明治四年中歐羅巴洲ノ獄制ニ倣ヒ我獄制ヲ改正スルヲアラントス而  
ノ英國所轄ノ香港新嘉舖地方ノ人種ハ我國人ト均シク粒食ヲ以テ性  
命ヲ保スルモノニシテ且萬國人民ノ輻湊スルトコロナルニ付其拘禁  
ノ方法ニ基カバ必ズ其宜キニ適スルノ議<sup>外臣公使等モコ</sup>アリ因テ政  
府ヨリ英國代理公使アダムス氏ニ依頼シ特ニ囚獄權正小原重哉及屬  
官二名ヲ香港新嘉舖及ビ其他ノ州府ニ派遣シ各地ノ未決監懲役場殖  
民所ノ方法ヲ問ハシム即是監獄則及圖式ノ因テ成ルトコロナリ<sup>現今</sup>  
<sup>ル所ノ統架ノ制モ亦此時ニ樣式ヲ</sup>  
<sup>彼ニ取り之ヲ改定シタル者ナリ</sup>  
監獄ハ市街ヲ隔テタル空闊高燥ノ地ヲトシ其區域ヲ大ニスベシ運動  
所ヲ設クレバ其左右ノ餘地ニ草木ヲ雜植シ罪囚ヲシテ心神ヲ怡ハシ

新鮮ノ氣ヲ吸入セシム可シ  
 凡監獄ヲ構造スルニ其制都鄙大小ノ別アリト雖モ只其制ノ堅牢ナランヲ  
 要ス隅角房口子門ノ左右上下等ハ最モ注意シ楹格ノ如キハ鍊鐵ヲ用フベシ  
 守卒看守所ノ制ハ圓形室ヲ獄舎四通ノ中央ニ設ケ一目洞視シテ障蔽  
 ノ弊無ラシム  
 獄ノ内外渾テ汚物ナキヲ要ス先ヅ土地ノ高低ヲ量リ各處水道ヲ穿テ  
 能ク潦水ヲ疏通シ每舎ノ雨霑及ビ日用ノ水渣ヲ送テ遠地ニ致シ周墻  
 外ト雖モ死水ノ溝渠ヲ置クベカラズ獄中ノ漏氣ヲ防グ所以ナリ  
 始テ入獄ノ者ハ裁判官ヨリ其郷貫姓名ヲ記シテ獄官ニ送ル獄官更ニ  
 其郷貫姓名ヲ本犯ニ證シテ之ヲ囚籍ニ記シ之ヲ時藏ス次ニ其肥瘠長  
 短或ハ初犯再犯等ヲ記ス次ニ其衣服ヲ檢査シ隱物アレハ之ヲ領置シ  
 再ビ其衣服ヲ着セシム

籍		囚			
刑名	長短	面容貌	初犯及再犯	入監及罪質大別	郷貫身分
掛リ死刑ノ時ハ檢使	懲役幾日或ハ幾年年號月日	面體顔色ヨリ四肢ノ形狀及ビ黑痣癩痕等ノ有無	初犯ナレハ初犯ト記ス再犯ナレハ前幾年何等ノ罪アリ何等ノ刑ナルヲ記ス	未決者入監ノ年號月日ヲ記シ又其罪質ヲ記ス譬ハ竊盜ヲ以テ捕ニ就ク者竊盜ト記スルノ類	某國某府管内某町住身分 何 某 幾年幾月
掛リ死刑ノ時ハ檢使	懲役幾日或ハ幾年年號月日	面體顔色ヨリ四肢ノ形狀及ビ黑痣癩痕等ノ有無	初犯ナレハ初犯ト記ス再犯ナレハ前幾年何等ノ罪アリ何等ノ刑ナルヲ記ス	未決者入監ノ年號月日ヲ記シ又其罪質ヲ記ス譬ハ竊盜ヲ以テ捕ニ就ク者竊盜ト記スルノ類	某國某府管内某町住身分 何 某 幾年幾月

掛リ死刑ノ時ハ檢使

名・稱  
官姓名

已決監ノ囚籍ハ少シク  
記式ニ取捨アルノミ

犯囚ノ衣服諸品ヘ之ヲ一庫ニ領置ス庫内ニ若干ノ戸柵ヲ設ケ蓋上ニ  
 番號ヲ記ス囚人ノ衣物ニモ亦番號ヲ附シテ之ヲ鎖ス  
 未決者入獄ノ節初犯若クハ再三犯ヲ糺スハ獄吏ノ專任タリ若シ再三  
 犯ナレバ之ヲ裁判所ニ告グ力ノ及ブ可キハ初犯ノ者ト居房ヲ同フセ  
 シメズ其惡事ヲ誘導スルヲ恐レテナリ  
 火災非常ノ節ハ守卒獄丁衆囚ヲ率テ之ヲ他所ニ避ク守兵ヲシテ之ヲ  
 監護セシム守兵ハ即今巡查ノ類監獄表門ノ開閉ハ刻限ノ條ヲ參考シ刻限ノ條  
 門ニ日ノ出沒ニ從フ但日中ト雖モ出入ノ外ハ其扉ヲ合シ貫木ヲ施ス  
 只其鎖鑰ヲセザルノミ  
 官署ハ門内ニ設ケ囚人ノ出入必ズ其舍前ヲ過ルヲ要ス其廣狹ノ如キ  
 ハ適宜ニシテ可ナリ  
 獄司以下毎日出席シテ事ヲ執ル退出ノ後ハ其風官及醫員輪番宿直ス

小使ハ獄署ノ雜事及ヒ他廳ヘ往復等ニ使用ス  
 未決者繫獄中ノ則目左ノ如シ  
 一 工役ヲ命ゼズ  
 一 役囚ノ制服ヲ着セズ  
 一 工業ヲ營ント請フ者ハ之ヲ聽シ且其器具ヲ貸シ與フ若シ其人罪ナ  
 キニ決スレバ獄中ニ營ム所ノ工錢ハ悉ク之ヲ與フ只器具ノ損價少  
 許ヲ官ニ收ムルノミ若シ罪アルニ決スレバ從前ノ工錢ハ前例ニ從  
 テ之ヲ給シ爾後ハ懲役ノ例ニ入ル  
 一 其親戚ヨリ衣食ヲ贈與セント請フモノアレバ之ヲ聽ルス但シ食物  
 ハ醫ヲシテ検査セシメ衣服ハ包藏物ヲ嚴查ス  
 一 書信ハ囚ノ情願已ムヲ得ザルヲアレバ獄司裁判官ト商議シテ之ヲ  
 聽ルス



一 監中日没後ハ談話ヲ禁ズ

一 裁判官其輕罪ナルヲ察スレバ其親戚若クハ故舊兩人以上ニ責保シ  
證書ヲ入レシメテ其家ニ還ス

但シ證書ニハ若シ囚人遁逃スレバ律法ニ依リ罰ヲ受ク可キヲ  
誓載ス

一 裁判官其重罪ナルヲ察スレバ事毎トニ指揮シテ嚴密ヲ極メシム

一 重典ニ處スルノ罪ナシト雖モ其人奸猾且ツ屢法ヲ犯シテ悔ザル者

ハ之ヲ處スルヲ他ノ輕囚ト同シカラズ亦事毎トニ注意ス

一 各囚ヲシテ毎朝其居ル所ヲ掃除セシム

一 運動場ヲ置ク其制他ノ獄舎ニ異ナラズ

一 刑場ハ監獄場ノ一隅ニ設ク周圍其垣牆ヲ高クシ其門扉ヲ嚴ニス

一 未決者病死及ビ刑死ノ遺體ハ親戚乞フ者アレバ之ヲ與フ乞フ者ナク

レハ官醫ノ解剖ヲ聽ルス

一 死刑ハ朝第十時ニ之ヲ行フ其餘ハ十時ヨリ十二時ノ間ニ之ヲ行フ

一 大祀令節國忌等ノ日ハ死刑ヲ行ハズ又大風雨及ビ非常ノ天變アレバ

時ニ臨テ刑ヲ止ム

一 死刑申渡シ決放ニ至ルマデ守卒獄丁之ヲ看護ス

一 出火及ビ非常ノ節ハ看護人ヲ増ス但シ豫メ近旁ノ屯所ノ警察官ト約

定スベシ監護人ハ犯人ト接話スルヲ禁ズ

一 明治六年即紀元二千五百三十三年一月三十日凡囚犯ヲ繫獄スルノ日其被ムル衣

服ノ外物品ヲ携帶スルヲ聽ルサズ其携帶スル物品アレバ官領置シ準

流以下決放ノ者ハ滿限ノ日皆之ヲ還與シ終身禁獄終身懲役及死罪或

ハ未決已決ヲ問ハズ繫獄中ニ病死スル者其身ニ被ムル衣服ノ外官ニ

領置スル物品ハ其親戚ニ下附ス親戚無レバ没入ス若シ親戚遠地ニ在

リ遞送ノ經費ヲ致スモノハ物品ヲ販賣シテ其代價ヲ交付ス但シ賍及  
犯時携帶セシ凶器ニ係レハ華士族ト雖モ之ヲ没入ス

明治六年六月七日未ダ口供ナラザル禁囚病死セシキハ即日其屍體ヲ  
親戚ニ下附セシム

明治七年即紀元二千五百三十四年六月二十四日閏刑中ノ禁錮ヲ禁獄ニ改メ司法  
省周圍内ニ禁獄人ノ拘置舎ヲ設ク監倉課ノ官員之ヲ管理ス各地方未  
テ禁獄ト相等シキ處置ヲナサシム

明治七年十一月二日司法省及裁判所所屬ノ監ヲ除クノ外全國未決已  
決ノ兩監ヲ內務省ノ統轄ニ歸ス明治七年十一月十五日其事務ヲ內務省第  
四月十七日警保寮ヲ廢シ更ニ警保局ヲ設ク其事務ヲ統理セシム  
明治八年即紀元二千五百三十五年五月市ヶ谷東京ノ未決監落成ス  
此ニ至テ始テ功ヲ竣ス五月二十八日小傳馬町未決監ノ禁囚ヲ其新

監ニ移シ小傳馬町舊監ヲ以テ懲役人ノ病監トナス明治九年懲役人  
ノ病監ヲ改テ私娼  
ヲ拘監スル處トナス厥後未ダ  
幾ハクナラズシテ之ヲ廢ス

明治八年十二月十八日市ヶ谷未決監石川島已決監ヲ警視廳ニ屬ス是  
東京府廳ノ管  
スルトコロ也

明治八年十二月二十四日司法省周圍内新監倉成ル監倉課官員之ヲ管  
守ス其建築ノ方法明治五年十二月頒布スルトコロノ様式ノ如シ因テ  
從前省内ニ在ル監倉ヲ廢毀ス是時ヨリ未決監ニ始テ燈火ヲ廢ク其製  
各房中ニ通ス  
瑠璃燈ヲ懸ケ其明  
各房中ニ通ス

明治九年即紀元二千五百三十六年二月三日司法省周圍内監倉及各裁判所所屬ノ  
監倉ヲ內務省ノ總轄トナシ東京ハ警視廳自餘ハ其所在ノ使府縣廳ニ  
司管セシム

第三篇

第二卷

(三) 遇待罪囚

明治二年即紀元二千九百二年三月十七日全國ノ罪囚有籍無籍ヲ論ゼズ其衣食ヲ給與ス六月八日ニ至リ有籍者ノ給與ヲ停ム但京都東京大坂ハ仍ホ徳川氏ノ舊ヲ襲ヒ有籍無籍ヲ論ゼズ官費ヲ以テ給與ス

明治三年即紀元二千九百三年囚獄司ニ於テ禁囚ニ給スル衣食ノ製ヲ定ム左ノ如シ

夏時ハ單衣薄色木綿ヲ以テ製ス冬時ノ袍モ亦同シ

冬時ハ綿袍

罪囚ノ貧困ナル者ニ之ヲ貸ス徒刑ニ處スレバ其徒場ノ制服ニ改メ其貸ストコロノ衣ハ返還セシム笞杖ノ刑ニ處スレバ刑畢テ其交付

スル親戚等ヨリ返還セシム無籍ニシテ東京府廳戶籍調所戶籍調所ハ實

ニシテ適宜ニ官ノ使役ニ供ス處交付スル者ハ返還セシメズ

右貸與ノ服ハ徒刑人ヲシテ洗濯セシム

飯從來ノ飯ハ沸液ヲ去リ之ヲ冷カニシ水糲中ニ納レ既シテ人一次ノ飯置ラ定ム之ヲ盛裝飯ト云今其弊習ヲ改正シ尋常ノ

炊法飯ヲ用ヒ一日兩炊

朝ハ豉汁汁糲並ニ蔬菜ヲ以テ實トナス夕ハ糲

鹽菜

右揚屋ノ差別ナク罪囚一人ニ付一日ノ豉量二十匁醬油二匁八才醬油料ニ汁實ノ價約子錢四文八分四厘糲實ノ價約子錢八文一分ヲ給ス但シ米ヲ給スル五等ニ分ツ

男四ノ間頭一人ニ付一日ノ飯料 白米五合四勺  
男四 全 白米四合五勺

女囚ノ間頭 全 白米四合

女囚 全 白米三合六勺

童男童女ノ四四十歳以下全白米二合七勺

但シ罪犯ニ非ズト雖モ父母罪ヲ犯シ童男童女ヲ携帯セシモノ

モ亦同シ

食鹽

右隔日ニ之ヲ給ス其量揚屋ハ五勺各房ハ一合揚屋ハ囚人少ク各房ハ

病囚未ダ病監ニ入粥ヲ喫セント請フ者ハ允ルス平常給スルトコロ麥

飯ヲ請フ者亦允ルス米麥ヲ等分ニ其他病囚ノ請フトコロ應禁ノ食品

ニ非ルモノハ臨時議シテ其請ヲ允スコト有リ

常食ノ外別ニ加給スル左ノ如シ

孝明天皇祭日

魚若シハ蔬菜

天長節

魚

正月朔日二日三日

魚

右各次給スル魚菜ノ價一囚ニ付錢四拾文トス

正月十五日

赤小豆粥

右一囚ニ付白米一合赤小豆三勺餅砂糖ノ價錢百文トス

七月十五日十六日 鹽鯖 素麵

右一囚ニ付兩品ノ價錢三百廿四文トス

禁囚ノ親戚故舊ヨリ衣食ヲ送致セント請フ者アレバ之ヲ聽ス其品目

ヲ定ムル左ノ如シ

甘藷 胡蘿蔔 蓮根

百合 蘿蔔 長芋

右烹煮シタルヲ贈ルモノハ方八寸ノ重箱一箇ニ納レ凡一ヶ月ニ五  
度ヲ聽ス

鹽菜澤庵漬ナ  
ハモノ 甘本 一升

梅干 一升

右食料

裕 春秋ノ時 一領

單衣 夏時 一領

綿袍襦袢 冬時 各一領

臥褥 不給四時 一展

右ノ贈致者アレハ大少依其品目書ヲ檢シ令史ヲシテ獄丁ニ命ジ其贈  
物ヲ檢査シ之ヲ囚房ノ前ニ陳列シ令史蒞ンテ贈致者ノ姓名ト品目ト  
ヲ其禁囚ニ告グ

司法省及各裁判所所屬ノ監倉ニ拘留人ノ食糧ハ一人ニ付一日白米四  
合十歳以下ノ男女ハ一人ニ付一日白米三合七勺トシ並ニ魚若クハ蔬  
菜鹽菜ヲ給ス皆時價ヲ以テ之ヲ辨ズ

明治三年二月各房ヲシテ毎月一兩次房中ノ藁席其他ノ器具ヲ房外ニ  
出シ器物ハ之ヲ濯ヒ臥具ノ類ハ日ニ曝サシム

明治三年三月囹圄中陰濕ノ氣積鬱シテ空氣ノ新陳代謝ヲ支フルヲ以  
テ病ヒテ釀ス者少カラズ因テ各房内ノ四邊ニ醋ヲ澆ギ其積鬱ノ邪氣  
ヲ驅ラシム

明治三年四月禁囚ヲシテ毎月六次一六ノ日以テス日正午十二時ヨリ日没ニ至  
ル迄ノ間ヲ以テ浴湯セシム且毎日熱湯ヲ各房ニ配與シ禁囚ヲシテ脚  
湯ヲナシ汚臭ヲ除カシム

明治三年六月禁囚ヲシテ酷暑ヨリ減暑ノ候ニ至ル迄ノ間毎日晝四ツ

時ヨリ夕七ツ時ニ至ル迄外檻ト内檻トノ間地ニ蔭席ヲ敷キ涼ヲ納レ  
シム他房ノ者ト混同接  
話スルヲ禁ズ

明治三年七月囚獄司佑令史蒞テ剃工ヲシテ各囚ノ梳剃ヲナサシム  
剃工一人ニ付雇錢九百文例年七月十  
三日ヲ以テ

明治三年十一月各房ノ禁囚二人ニ一箇ノ湯婆ヲ給ス約テ十一月中旬  
ヨリ翌年三月上旬迄トス

明治五年即紀元二千一十一年監獄則成ル未決囚ヲ遇スル規則左ノ如シ  
衣衾

未決ノ貧囚獄衣襦袢ヲ乞フ者アレハ時衣ヲ貸與ス

暑中ハ單衣一領トシ春秋ハ袷一領襦袢一領トシ冬時ハ綿入ヲ加ヘ三  
領トス單衣ハ三日毎ニ之ヲ洗ヒ襦袢ハ五日毎ニ之ヲ洗フ

枕衾ハ守卒毎朝獄丁ニ命ジテ之ヲ檢査シ汚損ナケレハ之ヲ一室ニ歛

メ房中ヲ掃除ス日暮又之ヲ出シテ各房ニ送ラシム

春夏秋三時ノ臥具ハ毛布一展若クハ褥一展夏時ハ別ニ莞一展ヲ與フ  
冬時ハ毛布二展草褥一展トス枕ハ半圓木ヲ用フ

病囚老囚ハ獄司醫ト議シ衾襖ヲ増加スルコトアリ

食料雜則ヲ  
付ス

未決者ノ食料ハ一人一日ニ付米白麥合セ四合十歳以下男女共ニ同ク

二合七勺トス麥ハ挽キ割リヲ用フ炊熟ニ便ナリ又印土米  
如キ麥價ヨリ昂キ時ハ麥ニ代用ス可シ

獄囚若シ其幼孩ヲ携シテ願ヒ情實ノ已ムヲ得ザル時ハ之ヲ聽ルシ

貧困ナレハ官費ヲ以テ之ヲ養フ監倉ニ在ル未決者ヲ除クノ外各囚ノ

食料皆同シ朝飯ハ飯汁鹽菜午飯ハ一羹鹽菜夕飯ハ鹽菜トスル類ナリ

毎日ノ定額左ノ如シ

野菜羹實鹽菜 各一人一日ニ付價錢拾文内外

醬油

一人一日ニ付量四勺

茶

一人一日ニ付量三匁

薪

一人一日ニ付量二百拾匁

常食ノ外加給ノ例左ノ如シ

一月一日

一人一日ニ付一餅一魚

孝明天皇祭日

一人一日ニ付一魚

神武天皇祭日

一人一日ニ付一魚

天長節

一人一日ニ付一魚

病囚ノ食ハ醫ノ言ニ由リ價直ヲ論ゼズ

未決者ノ監ハ每舍ニ浴場ヲ置ク各房接續舍ノ一方ニ設ク未決者ハ懲役ヲ命ゼズ

故ニ時々運動場ニ出テ逍遙シ花樹ニ灌ギ藥草ニ培ヒ以テ其身體ヲ養

フ

獄署内ニ書室アリ佳書ヲ藏シ以テ囚人ノ誦讀ニ供ス

獄舎ノ周圍内ニ置ク廁圍場ノ結構ハ尤注意ス可シ惡臭ヲ防ギ溝水ヲ

通シテ汚物ヲ流シ務メテ疾病傳染ノ患ヒナカラシム

每房容ル者ハ只臥具ト大中小ノ三桶ノミテ大桶ハ便器ニシテ蓋アリ以テ

之ヲ出シテ飲料ニ供ス小桶ハ唾器毎朝他物ヲ入ル、トテ許サズ

囚人ノ故郷遠地ニ在リ入獄ノ後其妻孥生計ナク饑餓スベキヲ訴レバ

獄司ヨリ管轄廳ヲ經由シテ其囚人故郷ノ地方廳ニ傳達スベシ

明治六年即紀元二千五百三十三年九月東京府廳ニ於テ既ニ囚獄司ヲ發シ東京囚

門ニ置也一時東京囚獄ノ未決囚有籍ノ者ノ官費ヲ停ム翌明治七年三月再

ビ舊ニ復シ官費トナス

明治七年即紀元二千五百三十四年九月十九日太政官令シテ明治八年即紀元二千

年一月ヨリ全國未決罪囚ノ衣食ハ有籍無籍ヲ論ゼズ官費ノ制ヲ定ム

其制左ノ如シ

食量

白米四合 平囚男女共

白米二合五勺 十歳以下男女共

但其半量ヲ以テ麥ニ換ヘ挽割チ加蒸シ又ハ合炊スルコトハ地方ノ

適宜ニ任カス

菜 野菜 魚肉 適宜 醬油 鹽菜 合テ代價一錢三厘

但病囚ノ食ハ醫員ノ言ニ從ヒ其證書ヲ取り實際點檢ノ上給與ス

常食ノ外加給

一月一日 二餅一魚代價二錢

孝明天皇祭日 魚代價一錢以下同

紀元節 魚

神武天皇祭日 魚

天長節 魚

以上一日一囚ニ給スルノ量トス

衣服

單衣

柿色 ペンカラ買ノ土ニ紺澁シ 一領

常尺窄袖以下皆 代價五十錢

夏時一度之ヲ給ス

袴 一領 代價七十五錢

春秋ノ内一度之ヲ給ス

襦袢 一領代價三十錢

春秋ノ内一度之ヲ給ス

綿袍 一領 代價一圓



冬時一度之ヲ給ス

三尺帶 一條 代價八錢五厘

手巾 一條 凡四時ニ給ス 代價五錢

襪 二條 代價二十五錢

臥具

褥 夏時ハ一展ニ以テ一展代價一圓二十五錢

毛布草褥等ニ換ルハ適宜タリト雖モ代價ハ定額ヲ踰ルヲ得ス

莞 一展代價五錢

枕 一箇代價壹錢

蚊帳 一垂但五人 代價四圓

右ノ内蚊帳ハ四五年繰ハ二年乃至三四年以上ヲ保タシム其衣類共時々洗濯修補ヲ加フ

以上罪囚ノ貧困ナル者ニハ衣服ヲ始七品ノ内欠乏ノモノヲ貸與ス

浴 夏時ハ水 冬時ハ湯

毎年五月ヨリ十月迄ハ毎月十二次十二月ヨリ四月迄ハ毎月六次一人

ニ付定費五拾錢

雜費

一囚ニ付一日ノ定費七厘トシ之ヲ以テ毎日炊用及衣類ノ洗濯并病囚煎藥等ノ炭薪其他必需ノ小費ニ充ツ

右衣食ヲ始メ一定ノ價額ヲ定ムト雖モ地方ニ因リ物價昂低一様ナラザルヲ以テ甲品代價有餘アルトキハ乙品代價ノ不足ヲ補フハ各地ノ適宜ニ任ス

明治九年即三十九年三月十二日微罪者若シハ老幼癡疾ノ類便宜ニ

依リ旅店或ハ親戚隣保ヘ責付スル者ハ一人ニ付一日ノ費用トシテ拾二錢五厘ヲ給ス料十二錢ヲ以テ一日三次ノ食料及ビ臥具點燈等ニ充ツ未決者ト雖モ自己ノ宅舎ニ在ルモノ及父兄ノ請ニ由リ保管セシムルモノハ此限ニ在ラズ

第三篇

第三卷

(三) 未決已決病監

明治三年即紀元二千五百三十年二月小傳馬町獄舎内揚坐敷ニ禁ズルノ制ヲ廢シ其房ヲ以テ重罪人ノ病監トナス

明治三年三月品川病監ヲ廢シ淺草千束村ハ善七郎ノ監守ヲ停メ囚獄司ノ官吏派出シテ其事務ヲ辦理ス善七郎ノ部ニ見ユ

明治三年三月囚獄司中醫局ヲ設ケ醫員ヲ置ク五人從前醫員ヲ置ク加

ルニ大學東校大博士尙中藤及助教得業生交ル々々日ニ直シテ病囚ヲ療

治ス又藥局ヲ設ケ藥局生二人ヲ置ク從前德川氏ノ制煎藥若クハ散丹圓膏藥ノ一貼ノ價銀二分五厘ト定ムルヲ停メ其價額ヲ定メズ

明治三年四月小傳馬町病監即從前ノ場每日午前四ツ時ヨリ午後八ツ

時迄ハ房扉ヲ開キ空氣ヲ疏通セシメ且夜中ハ燈火ヲ點セシム當時各房火ヲ點スル囚人ヲ撰ミ看病人トナシ飯量ヲ給スル間頭ニ同クス浴場ヲ

設ケ病囚ヲシテ毎日若クハ隔日ニ入浴セシム  
明治五年即紀元二千五百三十二年十一月監獄則成ル其方左ノ如シ

病監ハ最モ高燥ノ地ヲトス可シ監中唯未決已決ノ囚ヲ區別スルノミニシテ各囚ノ房ヲ區畫セズ窓戶ヲ寬廣シ生氣ヲ疏通シ四外ニ清潔ノ遊園ヲ開キ花卉ヲ植テ以テ病囚ノ遊觀ニ供ス可シ

病囚アレハ醫診察具狀シ獄司命シテ病監ニ移ス輕症ノ者ハ其房ニ於

ヲ保養セシムルノミ  
 重病ニ至レバ醫ノ病徵替ヲ裁判所ニ送ルベシ  
 看病人ハ未決監ハ同囚已決監ハ輕役ヲ以テス  
 病囚ハ諸事優遇スベシ飲食ノ如キモ醫ノ禁セザル所ニシテ驕奢ニ屬  
 セザル物ハ其嗜好ニ從テ之ヲ與フ若獄司怠リテ醫言ニ從ハズ因テ死  
 ニ至ル者アレバ罪獄司ニ歸ス  
 病囚死スレバ醫之ヲ檢査シ獄司ニ報ズ獄司具狀シテ之ヲ裁判所ニ告  
 グ夜中ハ醫一名醫局ニ宿直ス  
 明治八年即紀元二千五百三十五年九月二十日市ヶ谷未決監内ニ病監ヲ増置シ淺  
 草千束村ノ病監ヲ廢ス

第三篇

第四卷

懲役徒非合叙ス

明治元年即紀元二千五百一十八年大寶ノ制ニ基キ徒刑ヲ復ス東京ハ石川嶋寄  
 場ヲ以テ徒場トナス男監アリ女監アリ工場アリ其方法仍ホ徳川  
 氏ノ舊ヲ襲フ當時府藩縣モ徒場ヲ設クルモノアリト雖モ方明治三  
 年即紀元二千五百三十二年正月以來漸次徳川氏ノ制ヲ改メ醫局ヲ設ケ患者ヲ護  
 養シ神學佛學ノ師ヲ招キ徒刑人ヲ教導セシム從來籍無キノ人ニシ  
 テ其出生ノ地ヲ辨知シ其他ノ管轄ニ交付スルモノ男女合テ三百有  
 餘人ニ至ル

明治三年即紀元二千五百三十一年十二月新律綱領ヲ頒布ス徒刑ニ五ツアリ日ク一  
 年日ク一年半日ク二年日ク二年半日ク三年トス其工錢ノ法ヲ定ム府  
 藩縣各々徒場ヲ設ケ其他方便宜ニ從ヒ徒刑人ノ強弱ノ力ヲ量リ各業

コ就カシム毎日一人ノ雇工錢ヲ分半シ其一半ヲ以テ常食外ノ滋養品ヲ給與シ其一半ハ官ニ領置シ徒限滿レハ其領置セル錢ヲ下付シ生業ヲ營ムノ資トナサシム徒場ノ檢査所ニ於テ徒人ノ携帶品及應禁物ヲ隠匿スルヤ否ヲ檢査スルヲトコロ徒人ニ警諭スルコト左ノ如シ

一凡徒罪ニ處セラレ本場ニ押送セラレタル者ハ老幼強弱ヲ分チ其體力ニ應ズルトコロノ役使ヲ命ズ右ハ之ヲ以テ其罪科ヲ贖ハシムルノ趣意ナレハ場中ノ制規ヲ恪守スベシ其制規左ノ如シ

制規

徒黨ヲ企ル事

工作ヲ惰ル事

病ヲ伴フ事

徒場ヲ逃走スル事

竊盜スル事

博奕スル事

爭論鬪毆スル事

右七項ノ所行ヲ嚴禁ス若シ違犯スルニ於テハ必ズ其罰有リトス

一徒期滿テ後有籍ノ者ハ各自ノ生業ヲ營ムコト勿論無籍ノ者ト雖モ優

恤ノ處置アルニ付宜シク惡意ヲ改メ善事ニ遷ルヲ冒トスベシ

一期限内ハ辛勞ノ作業ヲ命ズルモ懲罰中ナレハ其命ニ背ク可カラザ

ルハ勿論滿期放免ノ時ニ至テ生業ノ資金多カラソコト冀望シ命ズ

ルトコロノ作業ヲ勉強スベシ

一許可ナクシテ濫リニ役場ノ門外へ出ルヲ得ズ

一房中若シハ炊房ハ勿論工作場ニ於テ火ヲ用フルトキハ失火セザル

コニ注意スベシ

一 惡事ヲ申告スル者ハ假令一旦同黨タリト雖モ其科ヲ免シ相當ノ賞

ヲ與フベシ

徒罪人ニ衣食臥具ヲ給スル左ノ如シ

五月五日 單衣一領赭黄色ノ綿布ヲ以テ製シニ裁ス但役付ノ字ヲ染出ス以下同ジ

九月九日 綿袍一領

十二月盡日 綿袍一領

間頭一人ニ付 四幅ノ臥褥一展

役付ノ者二人ニ付 四幅ノ臥褥一展

平役ノ者三人ニ付 五幅ノ臥褥一展

病考一人ニ付 四幅ノ臥褥一展

飯重病ノ者ハ粥ヲ給ス 夕ハ羹汁羹並ニ蔬菜ヲ以テ實トス

朝ハ豉汁

鹽菜

徒罪人一人ニ付一日ノ豉量二十五匁重病ノ男女ハ豉量十四匁 醬油一匁八才ニ羹料

汁羹ノ實ニ充ツル蔬菜及鹽菜ノ價約テ錢二十四文トス但米ヲ給ス

ル六等ニ分ツ

措油 飯一人ニ付一日ノ 立米八合

營繕耕耘 立米七合

役付及諸工作 立米六合

休役若シハ疾病 立米五合

女子 立米五合

重病ノ男女 立米二合五匁

常食ノ外別ニ加給スル左ノ如シ

正月朔日二日三日 魚

天長節

魚

孝明天皇祭

蔬菜羹

徒罪人ニ用紙ヲ給スルハ應紙ナリ 每月男ハ一人ニ付三拾葉女ハ一人ニ付  
五十葉皆之ヲ分テ三次ニ給與ス

徒罪人ノ浴湯ハ隔日トス 浴湯ノ時ハ勞役人ヲシテ毎日  
浴湯セシムハマモ之レ有リ

徒場各房内ニ地爐アリ毎年十月ヨリ翌年三月迄薪若干ヲ賦與シ之ヲ

燃シ温氣ヲ取ラシム且敷物ハ藁ヲ以テ之ヲ製ス 俗ニ之ヲ子  
コタト云フ 毎年十月

ヨリ翌年四月迄之ヲ用ヒシム其餘ノ時ハ莞ヲ用ヒシム

徒罪人ノ親戚故舊ヨリ衣食ヲ送致セント請フ者アレハ之ヲ聽ルス其

品目ヲ定ムル左ノ如シ

鹽ミ鱈

五十個

干魚類

五十個

醬油類

約テ壹升

鹽菜 即澤庵漬  
ナハモノ

二十本

梅干

壹升

煮豆類

八寸重入約テ一重

蔬菜類

小籠一籠

右食料

用紙 半紙ナ  
ルモノナ

五帖

手巾

二條

禪

二條

臥褥 木綿  
ノ類

一展

徒罪人ハ毎朝六ツ半時出房看守ノ吏 等外吏ニシテ  
使部ナルモノ 其人員ヲ點檢シ畢  
テ之ヲ率ヒテ工作場ニ至リ其業ニ就カシム夕七ツ時ニ至テ休業房ニ

入ラシム徒罪人病死スルトキハ佐令史及醫員蒞テ死屍ヲ檢査シ之ヲ其親戚ニ下付ス無籍或ハ下付スベキ親戚ナキモノハ之ヲ深川靈岸寺ニ瘞埋ス死者ノ衣服其所有品及銀器ノ工錢ヲ交付スベキ者ナキハ之ヲ官ニ没入ス

明治四年即紀元二千五百三十一年石川島徒場ニ新タニ病監ヲ建築シ愈々工作ノ業ヲ起シ其物品ヲ販賣スルノ方法ヲ定メ且學舎ヲ設置シ徒刑人ニ工作ノ餘暇ヲ以テ習字讀書ヲ勉メシム其學舎ノ定則左ノ如シ

定則

- 一 教授所ニ入ル者ハ博聞多識ヲ求メズ只管放心ヲ求ル一端ヲ得ンコトヲ欲スベキ事
- 一 信義誠孚ヲ旨トシ詐偽虛美ヲ堅ク禁ズベキ事
- 一 書ヲ讀ムハ直ニ履行ヲ欲シ無用ノ辨不急ノ察ヲ禁ゼシムベキ事
- 一 凡テ役使ノ餘暇ヲ以テ文ヲ學ビ人倫五常ノ道ヲ篤ク心得ルコトヲ緊

要トシ總テ行有餘力則學文ノ意ヲ體認スベキ事

明治五年即紀元二千五百三十二年四月笞杖以下ノ罪囚ヲ懲役法ニ處ス

明治五年九月石川島已決監内ニ縁ナシノ蘭席ヲ敷事ヲ聽ス後來用ル

明治五年十二月二十九日監獄則ヲ頒布シ已決囚ヲ處置スル方法左ノ如シ

已決者ノ監

已決者ノ監制ハ未決者ノ監ト異ナルナシ但暗室一二ヲ其旁ニ造テ獄法ニ違ヒ或ハ伴テ疾病ト稱スルモノヲ懲ス暗室中ニ鐵網孔ヲ穿テ空氣ヲ通シテ光線ヲ通ゼズ

罪已ニ決スレバ裁判官ヨリ其郷貫姓名ヲ記シテ獄官ニ送ル獄官更ニ其郷貫姓名ヲ本犯ニ證シテ之ヲ囚籍ニ記シ本書ハ別ニ次ニ其肥瘠長

短初犯再犯等ヲ記ス次ニ其衣服ヲ檢査シ懸物アレハ之ヲ領置ス着衣  
ヲ領置シテ制服ヲ着セシム  
役囚ノ衣服諸品ハ之ヲ一庫ニ領置ス庫内ニ若干ノ戸柵ヲ設ケ蓋上ニ  
番號ヲ記ス囚ノ衣服ニモ亦番號ヲ附シテ之ヲ鎖ス  
罪已ニ決シ役場ニ入ル者ハ裁判官ヨリ宣告書ノ寫ヲ獄官ニ致ス共式  
左ノ如シ

某縣村住身分

懲役幾十年

何 某

幾年幾ヶ月

罪文宣告全文

右宣告畢

年號幾月幾日

某裁判所

獄官宣告書ノ寫ヲ照シテ役場ニ入ル、一法ノ如クス但限滿テ之ヲ放  
免スルハ獄司ノ專任ナリ  
役囚懲役場ニ出テ工ニ服スル者ハ嚴ニ其疆域ヲ區別シ往來混淆スル  
ヲ聽サズ  
放免ノ節ハ獄官其囚ヲ引テ守兵屯所ニ至リ戒メテ曰ク汝ノ面貌各守  
兵皆之ヲ認ム若シ再ビ法ヲ犯セバ直ニ之ヲ捕フベシ今後惡心ヲ改メ  
善事ヲ行フベシト畢テ其囚ヲ免ルシ其由ヲ裁判所ニ告グベシ  
囚ノ故郷遠地ニ在リ入場ノ後其妻孥生計ナク饑餓スベキヲ訴レバ獄  
司ヨリ管轄廳ヲ經由シテ其地方廳ニ傳達スベシ  
凡役囚父母ノ喪ニ逢フ者ハ七日夫及ビ兄弟妻子ノ喪ハ三日各休役セ  
シム凡懲役一年以上ノ者病ニ罹リ休役スレバ一年毎トニ五十日ハ限  
内ニ算入シ五十日以外ニ過レバ病愈ル後仍ホ其欠役ヲ償ハシム懲役



一百日以下ノ者十日毎ニ二日ハ算入シ二日ニ過レハ其役ヲ償ハシム  
但シ屢次ニ及ブ者ハ前後通計合算シテ免除ス若出監シテ責付スル者  
アル時ハ限内ニ算入セズ

役囚ノ休日モ亦官員ノ休日ニ同シ當日第八時ヨリ十二時ニ至ル教師  
ノ講義アリ總囚ヲシテ聽聞セシム

各工ノ器械ハ之ヲ一庫ニ納メ朝夕出納ノ時官吏之ヲ監視ス其法毎朝  
各丁其管囚ヲ率ヒ來リ出シテ之ヲ貸ス收納ノ節ハ小使用囚ヲシテ  
破損ノ有無ヲ検査セシム

罪已ニ決シ懲役ニ服スル者ハ各般ノ工業ニ因テ役場ヲ異ニス飲食ノ  
如キモ亦工業ニ從テ直ニ役場ニ食ス

食堂

每獄ノ旁ニ食堂ヲ設ケ役囚ヲシテ會食セシム若シ其食堂ナキモノハ

之ヲ運動工役場中ニ食セシム若犯人ノ混淆ヲ忌ムモノハ食堂ヲ異ニ  
ス

浴場

浴場ノ多少ハ監獄ノ大小ニ由リ二三乃至五六トス毎日犯人ヲシテ役  
畢テ浴ニ就カシム夏ハ水冬ハ湯

女監

女監ハ建築ヲ別ニシ男監ト相接セズ其往來ヲ峻拒ス役場運動場副場  
浴場炊場等ノ如キモ亦他監ト同クセズ

懲治監

此監亦界區ヲ別テ他監ト往來セシメズ拘留人ヲ遇スル他監ニ比スレ  
ハ稍寛ナルベシ  
二十歳以下懲役滿期ニ至リ惡心未ダ悛ラザル者或ハ貧窶營生ノ計ナ

ク再ビ惡意ヲ挾ムニ嫌アルモノハ獄司之ヲ懇諭シテ長ク此監ニ留メテ營生ノ業ヲ勉勵セシムハ獄司ヨリ裁判官ニ告グ尙此監ニ留ム凡人民其子弟ノ不良ヲ憂フルモノアリ此監ニ入リテ請フモノハ之ヲ聽ルス

凡此監ノ拘留人ナシテ書籍ヲ習讀シ工業ヲ練熟セシメ能ク艱苦ヲ忍ビ改心シ以テ才藝ヲ成スモノハ拔擢シテ監獄ノ下吏トスルヲ聽ス平民罪ヲ犯シ贖罪スベキ者無力ニシテ情實贖スルヲ能ハザルモノ實決シテ懲役スル如キハ皆此監ニ入ル

脱籍無産復籍シガタキ者本刑懲役ノ限滿ナシ後ハ皆此監ニ移シ罪囚ト區別シ工藝ヲ習得セシメ獨立活計ノ目途ヲ立テ然ル後本人望ミノ地へ入籍セシム工藝ニ練達スレバ他囚第一等ノ工錢法ニ從フ

凡犯人癡疾及ビ盲人其他服役中疾病ニ罹リ殘疾ニ至ル者ハ皆寬役ヲ

執ラシム

常人懲役

常囚罪己ニ決スレバ先ヅ重鎖ヲ着シ第五等ノ役ヲ執ラシム一百日ヲ經過スレバ第四等ニ進メ輕鎖ヲ着ク四等ノ限ヲ經過スレバ第三等ニ進メ兩鈇ヲ着ス三等ノ限ヲ經過スレバ第二等ニ進メ片鈇ヲ着ス二等ノ限ヲ經過スレバ第一等ニ進メ戒具ヲ脱ス但監外出役ノ日諸囚皆長鎖ヲ用ヒ二人一連ト爲ス

殊藝

工藝アル罪囚第五等ノ役ヲ經過スレバ其長技ヲ專治セシム此ヲ殊藝ト名ク殊藝人ヲ分テ上中下二級ト爲ス異能妙技アル者ハ直ニ上級ニ進ム次ナル者ハ之中級ニ置ク又其次ヲ下級ト爲ス分級ハ物價ニ本間ニ價一圓ノモノハ製スル者ヲ上級トナシ七十五錢ヲ中級ト爲シ五十錢ヲ下級トナスノ類ナリ下級ハ兩鈇ヲ用フ中

級ハ片欵ヲ用フ上級以上戒具ヲ脱ス但長ク下級ニ在ル者ト雖モ常人  
懲役ノ第四等ノ限ヲ經レバ片欵ヲ用フルト中级ノ例ノ如シ第三等ノ  
限ヲ經レバ下級中级共ニ戒具ヲ脱スルト上級ノ例ノ如シ

老幼

老幼及ビ天稟虛弱或ハ病後ノ罪囚ハ始ヨリ輕鎖ヲ着シ輕役ヲ執シム  
後ヲ兩駄ト爲リ片欵ト爲リ及ビ戒具ヲ脱スルノ限ハ常人懲役法ノ例  
ノ如シ例ハ百日ト合テ二百日ヲ輕鎖ノ限トス三等ノ七十日ヲ兩欵ノ限  
トス二等ノ四十日ト合テ五十日ヲ片欵ノ限トス一等ノ五十日ヲ戒具ヲ  
脱スルノ限トス但十五歳以下ノ男ハ始ヨリ戒具ヲ用ヒズ

婦女

婦女ノ役ハ粗老幼ニ同シ但始ヨリ戒具ヲ着セザルト早ク一等ニ進ム  
ルトノ異アルノミ

役法役數表釋例及  
四表ヲ附ス

常人懲役ニ五等アリ每等ノ役法左ノ如シ

第五等 土石ヲ運搬シ荒地ヲ開墾シ米ヲ舂キ油ヲ搾リ石ヲ碎クノ

類ナリ碎石ハ街道ノ  
修繕ニ用フ

第四等 諸官邸ノ造營街路ノ修繕瓦陶煉化石等ノ調土及ビ耕耘ノ

類ナリ

第三等 木工竹工籐工鍛工石工桶工瓦工履工及ビ皮革工蠶織工ノ

類ニシテ一課專業ヲ要ス

第二等 第三等ト同シ但其長技ヲ以テ他囚ヲ教授セシム或ハ之ヲ

炊夫門番等ニ使用ス

第一等 第三等ト同シ但此限ヲ滿レバ放免ス

輕懲役ハ老幼婦女ヲ役ス掃洒洗滌裁縫紡織綯繩製藥養雞豚牧牛羊ノ  
類ナリ

四等五等ハ約テ監外ノ重役ニ服ス之ヲ外役ト名ク三等ニ進メハ約テ  
 監内ノ輕役ニ服ス之ヲ内役ト名ク内役ノ中又ツノ類ヲ分ツテ要ヲ例  
 へハ竹工十人ヲ一連トシ同所ニ工作セシム籐工織工ノ類モ亦然リ  
 愚鈍ニシテ工藝ヲ教フベカラザル者ハ四等ノ限ヲ經過スト雖モ猶外  
 役ニ服セシム外役ト雖モ三等ノ人ナラ

尋常懲役表

人	常	役 限									
		一 等	二 等	三 等	四 等	五 等					
	懲役一年	戒具ナシ	片	鈇	兩	鈇	輕		鎖	重	鎖
	同一年半	五十日	四十五日	七十日	百						
	同二年	九十五日	三十日	百七十日	百	五十日					
	同二年半	百三十日	百	二百日	二	百					
	同三年	百六十日	二百日	二百廿日	二	百三十日					
	同五年	半年五日	半年	一年	二百六十日	百					
	同七年	一年五日	半年	一年	二百六十日	百					
	同十年	二年五日	半年	一年	二百六十日	百					
	同終身	三年五日	一年	二年	三年	二百六十日	百				
	同終身	終身	七	年	二	年	五年	二百六十日	百		日

五等ノ期限ヲ經過スレバ之ヲ四等ニ進メ四等ヲ經過スレバ之ヲ三等ニ進  
 ム以上之ニ準ズ一等ノ期限ヲ經過スレバ之ヲ免ス此法ヲ設爲シテ罪囚ヲ  
 懲治ス但閏年ノ役限内ニアルモノハ一等ノ期限上ニ一日ヲ加算ス殊老  
 幼婦女モ亦同シ

殊		藝	
役限	戒具ナシ	同	上
一等	五十日	二百	二百
二等	九十日	二百	二百
三等	一百三十日	二百	二百
四等	一百六十日	二百	二百
同一年	同一年	同一年	同一年
同一年半	同一年半	同一年半	同一年半
同二年	同二年	同二年	同二年
同二年半	同二年半	同二年半	同二年半
同三年	同三年	同三年	同三年
同五年	同五年	同五年	同五年
同七年	同七年	同七年	同七年
同十年	同十年	同十年	同十年
同終身	同終身	同終身	同終身

工藝ニ巧ナル者ハ五等ノ期限ヲ經過スレバ其藝能ニ應ジ上中下三級ニ入ル然モ每級ニ經過ノ期限ヲ立テ常人僊役ノ四等三等二等ノ日數ヲ合シ期限ト爲ス之ヲ經過スレバ下級ノ者モ亦一等ニ超進ス異能ヲ殊遇シ工藝ヲ勸誘スル所以也

輕懲役表

老		幼	
役限	戒具ナシ	片	兩
一等	五十日	四十日	七十日
二等	九十日	五十日	九十日
三等	一百三十日	六十日	一百二十日
四等	一百六十日	七十日	一百三十日
同一年	同一年	同一年	同一年
同一年半	同一年半	同一年半	同一年半
同二年	同二年	同二年	同二年
同二年半	同二年半	同二年半	同二年半
同三年	同三年	同三年	同三年
同五年	同五年	同五年	同五年
同七年	同七年	同七年	同七年
同十年	同十年	同十年	同十年
同終身	同終身	同終身	同終身

老幼及ヒ弱質ノ者役ヲ執ルコト壯囚ノ如シナル能ハズ故ニ終始輕役ヲ執ラシム老幼弱質ヲ哀恤スル所以ナリ

女

婦

役		限		懲		一		二		三		四	
終	身	終	身	終	身	終	身	終	身	終	身	終	身
同	十	同	四	同	六	同	十	同	六	同	十	同	六
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
半	半	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
半	年	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半
年	年	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半
半	年	半	年	半	年	半	年	半	年	半	年	半	年
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日

婦女體質最モ軟弱故ニ戒具ヲ着セシメズ其一  
 等ニ進ムハ殊藝懲役ノ二三四等ヲ通算シテ一  
 期限トナスノ例ノ如シ且ツ其期限ヲ縮ムルモ  
 ノハ婦女ヲ哀恤スル所以ナリ

第一 監獄役數表釋例

此表ハ毎日各部ノ懲役人若干總數若干其中又内役外役若干ヲ知  
 ル爲メニ設ク

- 無數ノ工藝固ヨリ歴擧ス可ラズ今各役ヲ分チ二十三部トス各部ノ  
 外ニ習熟セル工藝ヲ具スル者アラハ其類ノ近キ部ニ入レ或ハ雜役  
 ニ入ル別ニ掲ケザル可ラザル者ハ各部ノ中其工人ナキ部ヲ紙貼シ  
 新ニ其名目ヲ立ツ可シ

○一六ノ日ハ休役ス故ニ其日ヲ除ク役類ヲ表ニ上スノ記式例ヘハ初  
 五日ト見テ竹工合テ八人アレバ五日ノ經線ト竹工ト緯線ト相合フ  
 界内ヘハト記ス漆工合テ十人トスレバ上ノ如ク經緯相合フ界内ヘ  
 ト記ス各部記シ終リ其總數ヲ日計ニ記ス然ル後當日監内ニ役ス  
 ル者ノ總數ヲ内役ノ部ニ記ス監外ニ役スル者ノ總數ヲ外役ノ部ニ

入ル滿一月ノ後日計ヲ相加シ其總數ヲ月計ニ記ス月計ノ配式ハ常ノ如ク幾千百幾十人ト書ス可シ

○總囚ノ人數ヲ知ルコト食糧ニ必要トス此表ニ就キ日計ノ數ニ未決監病監ノ人數ヲ加ヘ一日ノ全數ヲ知ル之ヲ一月ニ通シ更ニ休暇六日ヲ補入スレバ一月ノ食費モ亦推算ス可シ

第二監獄出金表釋例

此表ハ監獄ノ出金ヲ記ス日計月計第一表ノ例ノ如シ

雇夫給金

工業師獄丁等ヲ雇夫トス

諸品新製

新ニ造作セザル可ラザル物品及ビ破損シテ修理ス可ラザルノ器具改製等ノ價直ヲ指ス

諸品修繕

監内ノ屋宇墻壁溝滄等ヨリ諸器具ノ修繕ヲ指ス

日需物品

官舎ヲ始メ各獄用フル所ノ筆硯紙墨薪炭油等ヲ指ス

雇錢

工藝ナキノ罪囚第一等ニ進ミ雜役内役スル者毎日ノ雇錢ヲ記ス疾病アリ服役スル能ハザル者ハ之ヲ除ク

但一等ノ罪囚ハ概シテ之ヲ外役セシメズ若シ外役セシメバ其雇錢ハ別ニ之ヲ領置シ表ニ記セズ

食量

米麥茶鹽魚菜等ヲ指ス 米麥ノ類總シテ價ニ積算ス

諸藥

病囚用ナル所ノ藥品ヲ指ス

右ノ外雜費了レバ各其類ノ近キ者ニ算入ス病囚望ム處ノ食物飲料等ハ之ヲ藥餌ト看做シ諸藥ノ部ニ入ル、ノ類ナリ

○區界ノ横方直方ニ依リ記式ニ横書直書ノ別アリ此表ノ如キハ宜シク直書スベシ例ヘバ雇夫給金ヲ合セ一百五十圓トスレバ一五〇ト記ス諸品新製ヲ四十圓五十錢トスレバ四〇五五ト記スルノ類ナリ但シ一圓ヨリ九圓ニ至ル圓ノ單位トス一錢ヨリ九錢ニ至ル錢ノ單位トス厘以下ヲ奇零トス記數ノ後每單位ニ句讀ス可シ例ヘバ百圓六錢七ハ一〇〇六トノ如ク記ス横直皆同シ

但米ハ合ニ止リ錢ハ文ニ止ル勻ト分トハ四拾五入ノ法ニ從フ可シ入金算モ亦同シ

第三監獄入金表釋例

此表ハ監獄ノ入金ヲ記ス日計月計第一表ノ例ノ如シ

○各工製造スル所ノ器具牧畜スル所ノ鳥獸耕作スル所ノ菜穀等ヲ賣却スレバ其價直ヲ記ス

但物品ノ數及ビ作者ノ姓名等ハ之ヲ別簿ニ記シ置ク可シ

○第二等以下外役ノ雇錢ハ之ヲ其雇セシ者ヨリ受取リ其總數ヲ記ス

○第一等役囚製造スル物品ノ價金ハ別ニ之ヲ領置シ表ニ記セズ

○製造物品ノ内ニテ力ヲ用フル少コシテ代價ノ善キ者アリ力ヲ勞スル多クシテ代價ノ賤キ者アリ各囚ヲ誘ヒ善價ノ物品ヲ作ラシムルヲ緊要トス

○一人ノ雇錢假リニ二十錢トス善工アリ一日ニ直四十錢ノ物品ヲ作レバ一倍利アリトス此レ工藝ヲ勸督スル所以ナリ故ニ一月若クハ一年ノ役夫若干ト入金若干トヲ照シ工藝人ノ巧拙ヲ推ス可シ良工



此表ハ  
獄則ニ  
シテハ  
年明ニ  
布スル  
モテ  
當ノ  
ノ  
ハ  
ノ  
六  
六  
リ  
ノ  
線  
六  
除  
年  
至  
日  
休  
日  
ノ  
以  
三  
ト  
表  
改  
モ  
同  
シ  
之  
ニ  
同  
シ

第一監獄役數表

廿一日	廿二日	廿三日	廿四日	廿五日	廿六日	廿七日	廿八日	廿九日	卅一日	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	

幾年某月總計

多クシテ且ツ勉勵スルハ最上ノ監獄ナリ

○第四監獄歲計表釋例

此表ハ月計ヲ積ミ歲計ヲ知リ更ニ出入比較ヲ觀ル所以ナリ

○第一表ノ月計ヲ各月ノ下ニ記シ相加シテ役數總計ニ記ス第二第三表皆然リ

○一歲出入ノ數ヲ比較シ多數ヨリ少數ヲ減シ殘數ヲ有餘不足兩部ノ一ニ記ス出ルハ八ニシテ入ルハ十ニシテ殘餘ニシテ有餘不足ノ部

第 二 監 獄 出 金 表

日	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一							
給																																						
夫																																						
諸																																						
品																																						
修																																						
繕																																						
轉																																						
徙																																						
行																																						
刑																																						
各																																						
種																																						
日																																						
需																																						
錢																																						
食																																						
諸																																						
計																																						

幾年某月總計





刻限

囚人曉第六時ニ起キ各自ノ便器唾壺水桶ヲ洗滌シ畢リ喫飯ス第七時  
役ニ就ク第十一時ヨリ放役休息ス午飯後第一時再ヒ役ニ就キ第五時  
ニ至ル服役ノ時限八時間ト爲ス五時終役ノ後浴シ飯シ六時房ニ入り  
閉扉ス

但五月一日ヨリ七月盡日ニ至ルノ間午後第二時迄放役シ夕第六時  
終役ノ限トス

各囚ヲ檢閲スル一日ニ四次曉第六時後朝飯ノ時第十一時休役ノ時第  
一時再役ノ時暮六時入房ノ時ト爲ス每次獄丁其管スル所ノ囚人ヲシ  
テ追次整列セシメ獄司及ヒ副司丁長之ヲ點檢ス

年限

懲役百日以下ニ該ル者ハ第五等ノ重役ニ服セシム懲役一年以上第五

等ヨリ第一等ニ進ムノ日限年限ハ表ニ詳カナリ  
凡老幼婦女收贖ス可キ罪ヲ犯シ無力ニシテ追徴スルヲ能ハザル者並  
ニ折半減等法ニ從ヒ之ヲ役ス

老幼婦女ハ終始輕役ニ服スト雖モ其第一等ニ進ムノ期限老幼ハ常囚  
ノ如ク婦女ハ少シク之ヲ速ニス其詳ナルヲハ表ニ見ユ例ヘバ懸役テ一  
ハニ等以下毎事ノ合數三百十五日ニシテ一等ノ限ヲ八十日ト爲スノ類ナリ  
ハニ等以下毎事ノ合數三百十五日ニシテ一等ノ限ヲ八十日ト爲スノ類ナリ  
各役各等期限ノ表ニ見ユル者ハ定則ナリ時アリテ其等級ヲ黜陟シ歲  
月ヲ延縮スルハ特典ナリ賞罰ノ條ニ見ユ

工錢

凡役囚一等ニ進メハ其製作スル物品ヲ販賣シテ之ヲ官ニ領置シ其内  
ヨリ毎日錢百文ヲ給與シ放免ノ日右日給ノ百文ト毎日ノ食費トヲ除  
キ其殘金ハ悉ク之ヲ還付ス

工藝精シカラザルモノ一等ニ進メハ之ヲ炊夫焚夫小使等ニ役使シ每  
日ノ備錢ヲ通算シ放免ノ日其日給ト食費トヲ減シ其殘金ヲ與ルヲ前  
法ノ如シ但備錢ハ普通ノ備價四分ノ三ヲ以テ法ト爲ス外役ノ備錢亦  
同シ然レニ殊藝者ハ此例ニアラズ

囚徒ヲ備ハント欲スル者アレバ幾連十四ヲ一ヲ以テ之ヲ談定ス其備  
錢前法ノ如シ但毎連ノ獄丁往テ之ヲ監督ス殊藝上級ノ者ハ日ニ百文  
中級ハ五十文下級ハ廿五文ヲ給ス其一等ノ取扱ハ他囚ト同シキヲ勿  
論ナリ

監獄及ビ器械ノ修理其他百般ノ入費皆第二等以下總囚ノ工錢備錢ヲ  
以テ之ニ充ツル者トス

賞罰

第五等ノ一百日間ハ賞典ヲ用ヒズ

第四等ノ者能ク獄則チ守リ且技巧アリテ殊藝ニ至其期限ノ半ヲ過レハ專ラ其技ヲ執ルコトヲ聽ルス

懲役五年以上ノ囚能ク獄則チ守リ工役ヲ勉ムルコト他囚ニ勝ル者ハ第一等期限ノ半ヲ過ギ放免スル特典アリ特典ニ處スベキ者ハ獄司其管轄ニ具狀シ管聽之ヲ司法卿ニ告グ其許可ヲ經テ之ヲ施行ス

但懲役三年以下年限短キモノニハ容易ニ此典ヲ施サズ

罪囚ヲ罰スル六則アリ一曰捧鎖二曰貶等三曰鐵丸四曰擔重五曰暗室六曰懲鞭

第一則捧鎖 鐵棒ヲ兩足ニ堅鎖シテ佇立セシム其時間ニ半日終日ノ別アリ凡ソ獄則チ犯シ輕キ者ハ此罰ヲ用フ

第二則貶等 第一則ノ罰ヲ受ケ改心セザル者本等ヲ貶シ次等ノ役ヲ執シメ五十日ヲ過ギテ本ニ復ストシハ懲役一年第四等ノ期限ヲ百日

ヲルハ者ハ第五等ノ役ニ服スルコト五十日ニシテ再ビ本等ニ復レ通計八十日トス又本等ノ役ニ服スル通計百日ニシテ第三等ニ進ム餘ハ通計推シス

但第五等ノ者ハ等ノ貶スベキ無キヲ以テ第三則ノ罰ニ擬ス

第三則鐵丸 両手ヲ伸ベ重サ二貫五百目乃至三貫目ノ鐵丸或ハ他物ヲ其掌上ニ置キ一二時間長サ五六十間ノ地ヲ往來セシム

第四則擔重 兩石或ハ兩水桶ノ重サ十八貫乃至二三十貫ノ物ヲ一荷トス往來ノ距離及ビ時間ハ上條ニ同シ

第五則暗室 囚人ヲ闇室ニ入レ飯水ノミヲ給シ人ト言語ヲ接スルコトヲ許サズ七晝夜ヲ以テ期トス若シ改心セハ其限ニ滿タズト雖モ免シテ之ヲ出ス

第六則懲鞭 懲鞭ヲ加フルノ法ハ先ツ其罪囚ノ手足ヲ甘字架ニ緊綁シテ其臂ヲ苦ツ其數一十ヨリ三十ニ致ル

但懲鞭ヲ加フル前獄司醫ヲシテ罪囚ヲ診察シ其病ナキヲ證記セシ

脱監逃亡等ヲ企ル者ハ之ヲ第一則ノ罰ニ處シ更ニ其偏袖ヲ淺綠色ト爲ス再犯ノ者ハ第二則ノ法ヲ以テ之ヲ罰シ其兩袖ヲ淺綠色ト爲ス三犯四犯ニ至ル者ハ其偏袴ヲ剃ル

監外ニ出役スル者竊ニ禁止ノ物ヲ包藏シ或ハ妄ニ物品ヲ汚損シ虛病ヲ稱スル者等皆之ヲ第一則ノ罰ニ處ス病ノ虛實ハ醫ヲ

但第一則ヨリ第六則迄ノ罰ハ獄司之ヲ專決ス

脱監越獄反獄等ノ犯罪ハ裁判官ノ處分ニシテ獄司之ヲ專決スルヲ得ズ獄囚守卒ノ脱ラザルニ乘ジ密ニ自ラ門ヨリ逃シ出スル者之ヲ越獄ト謂ヒ強ヲ恃ミ衆ヲ恃ミヲ脱監ト謂フ然ト門ヲ穿テ逃走スル者之ヲ反獄ト謂フ

書信

書信ヲ獄中ニ通ズル者ハ官吏先ヅ之ヲ檢閲シ害ナケレバ之ヲ聽ス獄囚ノ答書モ亦然リ但印紙一枚ヲ與フルノ外私書ヲ用フルヲ聽サズ紙印ハ縦五寸五分横八寸ニシテ獄印アム者ヲ謂フ

已決者百日以下ハ書信毎月一次懲役一年以上ハ三月一次懲役五年以上ハ六月一次ヲ聽ス但未決者ハ此限ニ在ラズ然モ印紙及ビ檢閲ノ法前文ニ同シ其詳ハ未決監書信條ヲ參照スベシ

食料

各犯ノ食料少差アリ懲役第五等ノ者ハ一日ニ米白麥合テ七合第四等以上及ビ殊藝並ニ懲治監ノ囚ハ同五合五勺輕役寬役者ハ同シク四合トス麥ハ挽割ヲ用フ炊熟ニ便ナリ又印土米ノ如キ麥價ヨリ賤キハ麥ニ代用スベシ

役囚ノ食料皆同シ朝飯ハ豉汁鹽菜午飯ハ一羹鹽菜夕飯ハ鹽菜トス其他七日ノ時々鮮魚鹹魚或ハ乾魚ヲ食セシム魚類ニ乏キノ地ハ牛羊豚雞ノ骨汁ヲ用ヒ菜蔬ヲ



ルア之ニ代フ  
ルモ可ナリ

毎日ノ定額左ノ如シ

魚肉類

一人一日ニ付價十文内外

野菜

同上

菱實

同上

鹽菜

同上

醬油

一人ニ付一日量四勺

茶

同 量三勺

薪

同 量二百十勺

常食ノ外加給ノ例左ノ如シ

一月一日

二餅一魚

孝明天皇祭日

一魚

神武天皇祭日

一魚

天長節

一魚

病囚ノ食ハ醫ノ言ニ由リ價直チ論セズ

衣衾雜則ヲ  
附ス

雜衣ハ柿色ノ短衣窄袖股衣ヲ用フ但婦女ノ衣ハ其袖ヲ窄スルノミ獄  
衣

ヲ染メ薄澁ヲ加ヘ  
久シキニ耐ヘシム

獄衣ニ番號アリ墨字ヲ以テ第幾舍名獄第幾百幾十幾番ト記ス其裁縫摺

字皆輕役人ヲ使用ス

暑中ハ單衣一領トシ春秋ハ袷一領襦袢一領トシ冬時ハ綿入ヲ加ヘ三

領トス單衣ハ三月毎ニ之ヲ洗ヒ襦袢ハ五日毎ニ之ヲ洗フ

外役ノ間ハ別衣ヲ着シ歸獄スレバ價ヲ更ヘシム包藏物ヲ豫防スル所  
以ナリ

獄衣更換ニ期限アリ布品ノ精粗 豫メ換衣ノ期限ヲ定ムテ限滿レハ新衣ニ換フ安リ  
ニ之ヲ汚損スル者アレバ罰則ニ從フ

獄丁其管下ノ獄衣ヲ檢査スルヲ七日毎ニ三次トス

各犯罪己ニ決スレバ之ニ獄衣ヲ與ヘ從前ノ衣服ハ獄官之ヲ領置シ放  
縱ノ日之ヲ還付ス

夏時ノ臥具ハ毛布一展莞一展トス冬時ハ毛布二展草蓆一展ト爲ス草蓆

ハ毛布ニ覆ラリ枕ハ杉ノ半圓木ヲ用フ枕衾ハ守卒毎朝輕役者ニ命

シ之ヲ檢査シ汚損ナケレバ之ヲ一室ニ歛メ獄中ヲ掃除ス日暮又之ヲ  
出シテ各房ニ送ラシム

病囚老囚ハ獄司醫卜議シ衾襖ヲ増加スルヲアリ

己決者ハ毎日服役動作運養シ其筋骨健ニスルヲ以テ別ニ運動場ヲ設  
ケズ兩日ニハ各獄中ニテ運動ヲ爲サシム

懲役場門戸ノ開閉ハ日ノ出沒ニ從フ但日中ト雖モ出入ノ外ハ其扉ヲ

合シ貫木ヲ施ス只其鎖鑰セザルノミ

場中ニ書室アリ佳書ヲ藏シ以テ囚人ノ誦讀ニ供ス

守卒ハ晝夜獄内ヲ監護シ炊夫掃夫等總テ犯人ノ使用スル者ヲ指揮ス

工業師ハ各工ノ練達スルモノヲ雇フ

工業師ハ私ニ犯人ト談話シ且犯人ノ請托ヲ受ケ他人ノ贈答ヲ致スマ

シキノ由ヲ證書シ保人ノ押印ヲ具シ獄司ニ納ム其給金之ヲ世間ノ傭

錢ニ比スレバ優ナリ

獄丁ハ皆ナ傭夫ニシテ上中下ノ三等ニ分ツ役囚ヲ指揮スルニ鐵杖若

シハ木杖ヲ用フ

火災非常ノ節ハ守卒獄丁等衆囚ヲ率テ之ヲ他所ニ避ク臨時守兵ヲシ

テ之ヲ監護セシムベシ

明治六年即紀元二千五百三十三年二月徒場ヲ改メ懲役場トナス  
明治六年五月改定律例ヲ頒布ス是ヨリ先キ刑名ニ苦アリ杖アリ徒アリ流アリ斬絞アリ是ニ至テ斬絞ノ外懲役終身ノ刑ヲ設ケ其以下ハ一體ニ懲役法ニ處ス

明治七年即紀元二千五百三十四年九月十九日大政官令シテ明治八年即紀元二千五百三十五年一月ヨリ全國懲役人ノ衣食ハ有藉無藉ヲ論セズ一旦官費ヲ以テ支給シ追次雇工錢收入ノ内ヨリ償却セシム其方左ノ如シ

食量

白米七合

強役ノ者

白米五合五勺

平役ノ者

但其半量ノ米ヲ以テ麥ニ換ヘ挽割ヲ加蒸シ又ハ合炊スル等地方適宜ニ從フ

菜野菜 適宜鹽醬油 共代價一錢三厘

但病囚ノ食ハ醫員ノ言ニ從ヒ其證書ヲ取リ實際點檢ノ上給與ス

常食ノ外加給ス

一月一日

二餅一魚

代價二錢

孝明天皇祭日

魚

代價一錢以下同

紀元節

魚

神武天皇祭日

魚

天長節

魚

以上一日二四ニ給スルノ量トス

衣服

従前ノ衣服ハ獄吏之ヲ領置シ本行ノ獄衣ヲ與フベシ尤地方ニ依リ授與ノ方法全ク備ラズ傭工錢ヲ以テ獄衣新調ノ費ヲ償フニ足ラザ

ル間ハ役場構内ノ工役及ビ監内ノ常服ハ當分各囚從前ノ着服ヲ用  
ヒ或ハ古衣ヲ買テ之ヲ補フ等ハ地方ノ適宜ニ從フ

但使役ノ所作ニ依リ短衣服等ノ便ヲ要スルモノハ外役衣ヲ着  
用セシムベシ

單衣

柿色ベソガヲ質ノ土ニ澁シ

常尺窄袖以下皆同 一領 代價五拾錢

夏時一度之ヲ給ス

袴

一領 代價七拾五錢

春秋ノ内一度之ヲ給ス

襦袴

一領 代價三拾錢

春秋冬ノ内一度之ヲ給ス

綿袍

一領 代價壹圓

冬時一度之ヲ給ス

三尺帶

一條 代價八錢五厘

手巾

一條四季ニ與フ 代價五錢

禪

一條 代價二拾五錢

右七品ハ監内ノ常服トス

單衣

柿色短衣窄袖以下皆同

一領 代價四拾錢

夏時之ヲ用フ

單股衣

一箇 代價二拾五錢

夏時之ヲ用フ

袴

一領 代價六拾錢

春秋之ヲ用フ

襦袴

一領 代價三拾錢

春夏秋冬之ヲ用フ

綿袍

一領 代價六拾五錢

冬時之ヲ用フ

拾股衣

一箇 代價五拾錢

春秋冬之ヲ用フ

右六品ハ外役囚トス時宜布木綿ヲ以テ之ヲ制シ上衣ノ背又ハ胸ニ番號ヲ記シ各犯ノ輕重ヲ區別スベシ

臥具

褥

夏時ハ一展以テニ一展代價壹圓廿五錢

毛布褥等ニ換ルハ適宜タルベシト雖モ代價ハ定額ニ踰ルヲ得ズ

莞

一展

枕

一箇

蚊帳

一垂 共用 代價四圓

右ノ内蚊帳ハ四五年褥ハ二年乃至三四年以上ヲ保タシム其衣類共時々洗濯修補ヲ加フ

浴湯 夏時ハ水 冬時ハ湯

毎年五月ヨリ十月迄休日ヲ除キ毎日

十一月ヨリ四月迄隔日一人ニ付定費五拾錢

強役ノ節ハ其度々浴セシム

雜費

一囚ニ付一日ノ定費金一錢トシ之ヲ以テ毎日炊用及衣類ノ洗濯並ニ病囚煎藥等ノ炭薪其他必需ノ小費ニ充ツ

右衣食ヲ始メ一定ノ價額ヲ立ト雖モ地方ニ依リ物價昂低一様ナラサルヲ以テ甲品代價有餘アルトキハ乙品代價ノ不足ヲ補フハ各地ノ適

宜ニ任ス

明治七年即紀元二千五百三十四年一月二十九日役囚ノ父母病ニ罹リ已ニ危篤ニ臨ミ役囚ト面會ノ意志切ナルモノハ親戚隣佑等ヨリ其旨趣ヲ記載シ戸長或ハ町村用懸リノ副書ト併セ以テ獄署ニ具申シ其情願已ムヲ得ザルキハ願フ者ヲシテ若シ遁逃スレバ律法ニ依リ罰ヲ受ク可キ事ヲ記載セシ證書ヲ納レシメ守卒ニ命シ囚犯ヲ父母所在ノ家ニ警送シ戸長ト約會シテ暫時面見スルヲ聽ス尤モ遠地ニ係リ多少費用ヲ致スト雖モ一切官給ノ限ニアラズ

但面見ノ時ハ只痛苦慰言ノ應答ニ止メ他故ニ及ブヲ聽サズ約會者ヲシテ其言フ所ヲ詳記シ獄署ニ出サシム若シ俱ニ他故アリテ言ハザルヲ得ザルヲアレバ別ニ其事狀書ヲ獄署ニ收メ答辨ヲナサシメ其往復ノ本書ヲ寫シ裁判所へ送致ス檢閱ノ順序用紙ノ制等ハ監獄

則ニ參照シ其欠役ノ時日ハ限内ニ算入セズ

明治八年即紀元二千五百三十五年五月二十五日閏刑禁獄人ノ自費ヲ停メ翌六月ヨリ輕役者ノ給額ニ準シ官費トナス自宅ニ禁ゼラルハ此限ニアラズ

明治八年十一月五日懲役一年以上ノ服役者若シハ懲治監ニ在ル者ヲシテ健康ヲ保スル爲メ梳剃濯沐ヲ怠ラザラシム其斷髮ダランヲ欲ルモノハ之ヲ聽ルス

明治九年即紀元二千五百三十六年九月廿四日懲役人役期己ニ滿チ其本籍ニ照會スルノ間授産場若シハ房治監ノ別房ニ置ク者ノ經費ハ未決ノ平囚ニ準ズ其際攝養ノ爲メ適宜ニ工作セシメ得ルトコロノ工錢ハ其使用スル器具ノ損料ヲ扣除シ剩餘ハ悉ク之ニ付與ス

明治九年九月二十六日凡己決ノ囚人ヨリ其同囚ノ非違ヲ報告シ若クハ善行アル者ハ刑法ニ按ツテ本罪ヲ減シ得ベカラザル者賞スルニ別食ヲ以テス其額一人

ニ付二十五錢ト定ム

第三篇  
第五卷

流移

明治三年即紀元二千五百三十二年四月流移人ニ錢貨ヲ給スル額ヲ更正ス左ノ如シ

揚屋ニ禁ズル者一人ニ付錢二十貫文揚坐敷ハ既ニ之ヲ廢ス

平民 一人ニ錢十貫文

流移人ハ妻妾ノ隨行ヲ聽ス其發遣ノ日親戚訣別ヲ乞ヘバ獄署ノ糺問

所糺問所ハ獄舎ニ於テ官吏相莅テ其親戚ト對語セシム總川氏總川氏ノ時ハ

只一語ヲ聽スルノミ其他ノ處置ハ徳川氏ノ舊ヲ沿襲ス

明治三年十一月流刑ヲ停メ准流トナシ其罪囚ヲ獄中ニ禁ズ

明治六年即紀元二千五百三十三年准流ノ者ハ懲役法ニ處ス

跋

自

國家之大柄三司獄居其一夫元惡大  
慙罪當死流者姑置之至若矮巷小民  
則衣食既足猶為穿踰之盜者蓋鮮矣  
自王室中興專傲歐采法制律加新刑  
罰亦不必率由舊章殆似罰不教之民



者且據第七回統計年鑑明治十九年  
歲尾天下罪囚在監者七萬千八百十  
九人獄舍所費金四百四萬三千三百  
六十一圓夫使細民蠢良民且糜官帑  
至如此之多苟任邦家之重者豈可不  
寒心哉蓋我邦古先聖王尤用心於治

獄所以全天位盡天職至矣輒近之士  
唯從事郭索之文先王之遺制則反瞞  
然俚語所謂燈臺基暗者矣吾曹承乏  
法官竊有愧焉先輩米華小原君與余  
同寮頃者著大日本國獄制沿革史來  
徵一言君前在內務省專掌獄制今轉

夫審院既老練世務又通國朝典故此  
書之裨於世豈俟余言姑書數語寘諸  
卷末不敢虛辱交之義也

明治二十二年七月

法學士 山田喜之助撰

版權登錄



獄制沿革

明治廿二年九月十五日印刷

定價金二十五錢

同 年九月廿六日出版

東京市神田區駿河臺袋町七番地

著者 小原重

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

發行者 原亮三

同

印刷人 關幸吉

同

發兌 金港堂本店

大賣捌所 大坂北久寶寺町四丁目 金港堂支店

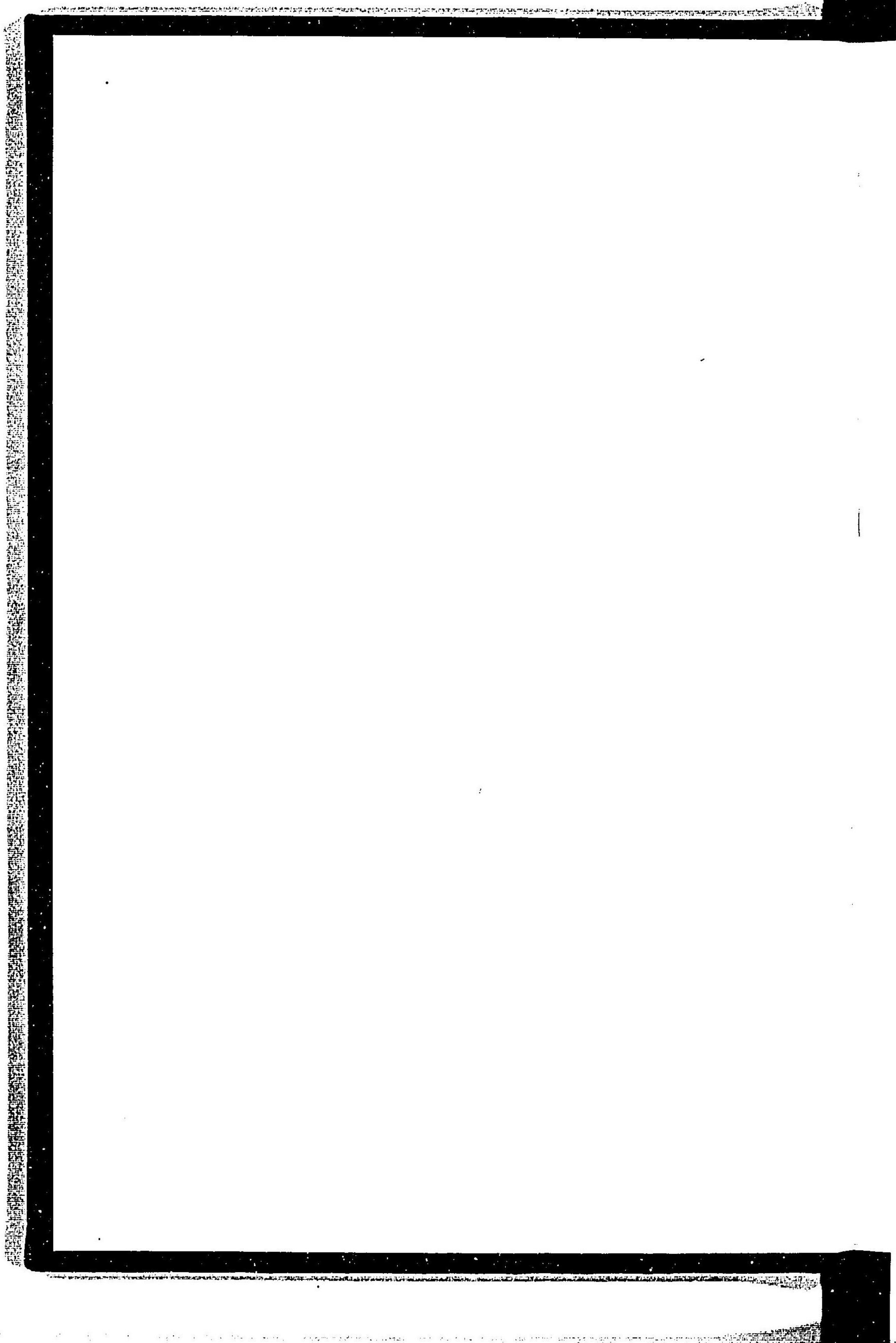
版權所有

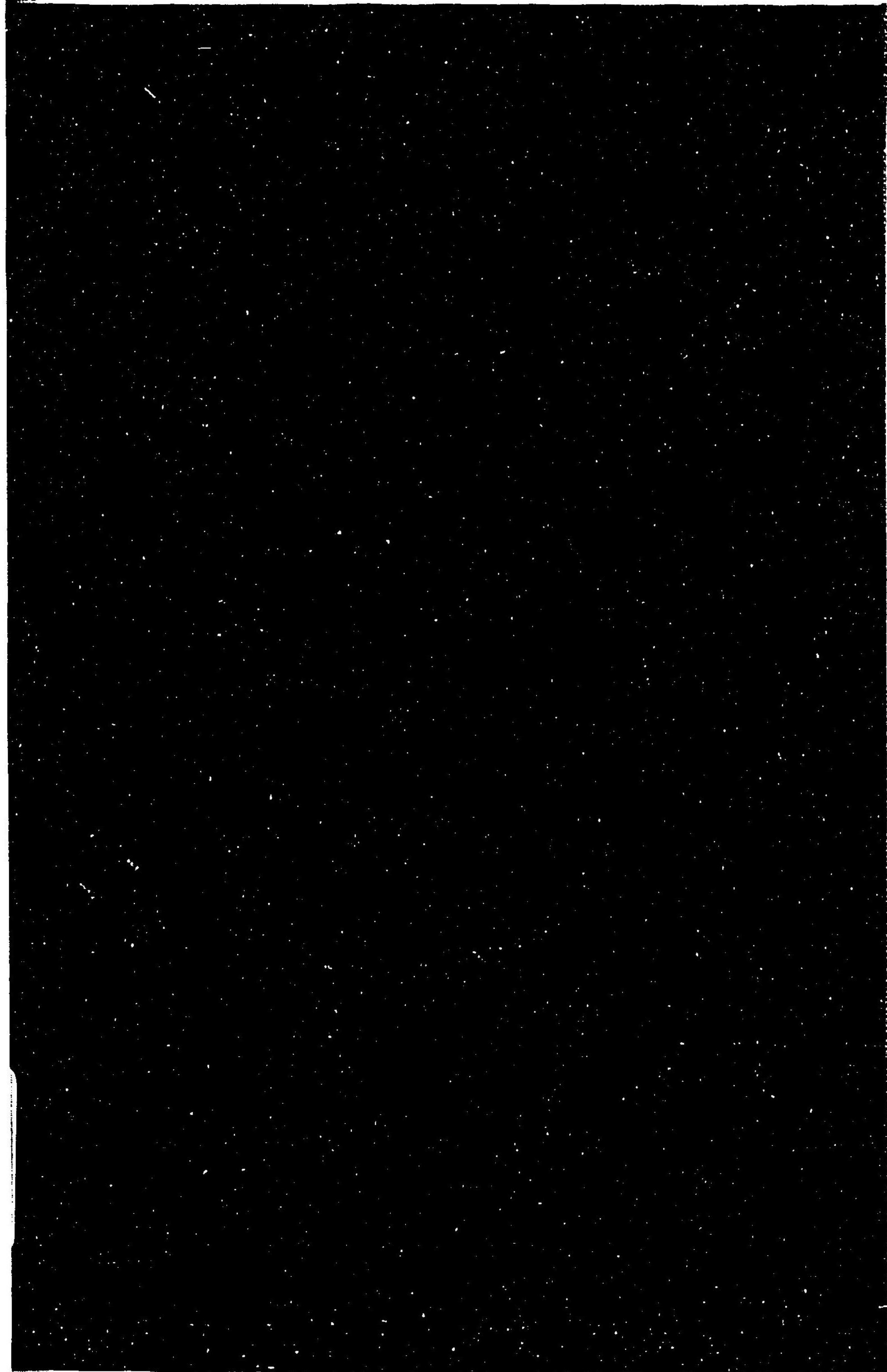
2424

20  
4  
136

事  
物  
情  
人

塩  
入  
大  
粉





25  
202

030747-000-5

25-202

大日本獄制沿革史

小原 重哉/著

M22

BBB-0207



